

新潟県中之島町

# 観音寺遺跡

県営広域営農団地農道整備事業及び  
県営湛水防除事業に伴う発掘調査

1995

中之島町教育委員会

新潟県中之島町

# 観音寺遺跡

県営広域営農団地農道整備事業及び  
県営湛水防除事業に伴う発掘調査

1995

中之島町教育委員会

## 序

私たちの町は、母なる大河信濃川の辺にあって荻谷田川、猿橋川に囲まれ、その名が示すように穀倉中之島として発展してきた。

町全体は、ほぼ平坦である。町の中央に位置する松ヶ崎新田、上沼新田地内の周知の遺跡である観音寺遺跡が県営広域営農団地農道整備事業及び県営湛水防除事業において道路・排水路として削平されるために事前に埋蔵文化財の確認調査を実施し、遺跡の規模、性格、内容の記録保存を図ることとなった。

中之島町は発掘調査の事例が少なく、昭和50年度の北陸高速道建設に伴う杉之森遺跡の1例があるのみである。それに町内の土地の60%強が水田で表面採取が不可能である。そのため埋蔵文化財については不明なことが多く、今後の発掘調査による成果が期待される。観音寺遺跡という名称から、この調査区域は以前お寺だったのではないかと思われる。

調査主体は中之島町教育委員会であり、発掘担当者として山武考古学研究所の調査員である近江屋成陽氏にお願いした。調査期間は平成6年7月15日から同年10月7日までである。

今回の調査では残念ながらお寺の跡と思われるものは発見されていなかったが、穴・井戸・溝・土器・木製品・炭化した米などが見つかри、このことから平安時代にこの周辺で人が住んでいたことが判明した。

また三条大地震の際の流砂現象が認められ古代の遺跡が、地震の噴砂跡に切られていることは地震考古学の研究に良好な資料を提示してくれているとのことである。

終わりに調査にご協力いただいた皆様に対し、ここに深甚なる謝意を表す次第である。

平成6年度3月

中之島町教育委員会

五十嵐 昭治

## 例 言

1. 本書は、新潟県南蒲原郡中之島町大字上沼新田東村前618番地他に所在する観音寺遺跡の発掘調査報告である。
2. 調査は、中之島町県営広域営農団地農道整備事業及び県営湛水防除事業に伴う事前調査として実施した。
3. 調査は中之島町教育委員会が行うもので、現地での調査は山武考古学研究所員の近江屋成陽が教育委員会に出向し調査を担当した。
4. 調査期間は平成6年7月15日から同年10月7日まで実施した。
5. 調査面積は2,248㎡である。
6. 本書の編集は近江屋が担当し、整理作業には伊藤順子、坂本秀美、本田利子、三浦京子の協力を得た。
7. 執筆分担は以下の通りである。

第1章	渡辺一司（中之島町教育委員会）
第2章～第6章	近江屋成陽
第7章 第1節	パリノ・サーヴェイ（株）
第2節	寒川旭（通商産業省工業技術院地質調査所）

8. 遺物の一部須恵器大甕1点の復元及び金属製品の修復は（株）武蔵野文化財修復研究所、炭化米の同定はパリノ・サーヴェイ（株）に委託した。
9. 出土遺物、調査記録類は中之島町教育委員会が一括保管している。
10. 発掘調査から本書の作成に至るまで以下の諸氏、諸機関に御教示・御協力をいただいた。厚く御礼を申し上げます。次第である。（順不同）

安藤正美・伊藤秀和・大橋信彦・小野塚徹夫・金子正典・木村康裕・寒川旭・塩路真澄・田村浩司・高橋保・戸根与八郎・松田政基・新潟県教育庁文化行政課・加茂市教育委員会・栄町教育委員会・三条市教育委員会・中之島町住民福祉課・見附市教育委員会・（株）旭工務店測量設計事務所・（株）遠藤建設・（株）五十嵐重機・サープラックス・（株）テック新東・（株）武蔵野文化財修復研究所・パリノ・サーヴェイ（株）・前橋文化財研究所

11. 発掘調査の参加者は以下の通りである。

上野幸江・内山憲・江口竹男・小黒長司・小坂井喜代一・小菅智広・小林一次郎・小林良市・近藤仁志・笹岡信夫・佐藤由・関口浩司・高山恒弘・内藤茂・中村巖・中村用二・蕪沢銀一・蕪沢フミ・蕪沢正博・野上奥治・長谷川伝衛・林洋一・原多喜二・原田正三・発地勇・堀猛・本間俊次・本間清・本間啓・本間ミイ・本間用一・皆川キシ・村越保・山崎孝平・吉田寅一・渡辺正司



## 凡 例

1. 挿図中の北は座標北である。
2. 本書に使用した地形図は以下の通りである。  
第1図 国土地理院5万分の1『三条』 第2図 遺跡周辺地形図2千5百分の1『中之島町』
3. 本遺跡の略称は94N. KNである。
4. 遺構の記載は以下の通りである。
  - ・遺構番号は混乱を避けるため現地調査時の番号をそのまま用いた。したがって、調査時に遺構ではないと判明したものは欠番とした。欠番 9・16・18～21・24・25・29～33号土坑
  - ・遺構の深さは残存深度である。
5. 挿図の縮尺は以下の通りである。  
土坑 1/60 溝 1/400 全体図 1/600 土器・石器・木製品 1/4 金属製品 1/1
6. 遺物のネーミング記号は以下の通りである。  
土坑=土 溝=ミ 包含層=包 表採遺物=遺跡名のみ  
グリット=G  
例 1号土坑No.1出土遺物 94NKN-1土-1
7. 土器実測図の断面は須恵器は黒塗り、その他は白ぬきとした。
8. 遺物の重さは基本的にバネ秤で計測し、100g以下のものは上皿天秤で計測した。
9. 挿図に使用したインレタ・スクリーントーンは以下の通りである。

● 土器 ▲ 石製品 □ 金属製品 △ 木製品



地 山



噴砂跡



木材の範囲

# 抄 録

フリガナ	カンノンジイセキ
書名	観音寺遺跡
副書名	県営広域営農団地農道整備事業及び県営湛水防除事業に伴う発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	中之島町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1集
編著者名	近江屋成陽 渡辺一司 寒川 旭
編集機関	山武考古学研究所
所在地	〒286 千葉県成田市並木町221 Tel 0476 (24) 0536
発行機関	中之島町教育委員会
所在地	〒954-01 新潟県南蒲原郡中之島町大字中之島788番地 Tel 0258 (66) 1310
発行年月日	西暦 1995年 3月 25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カンノンジイセキ 観音寺遺跡	ニイガタケンミナミカンバシラダンナカノシマチオオ 新潟県南蒲原郡中之島町大 アザカミヌマシラデンヒガシムラマエ バンチ 字上沼新田東 村前618番地 ほか 他	153648		37°34'04"7	138°51'42"66	19940715 ～ 19941007	2,248	県営広域営農団地農道整備事業及び県営湛水防除事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
観音寺遺跡	集落跡	平安・中世	土坑 29基 溝 12条	土師器環・甕、須恵器甕・環・有台環・蓋・長頸瓶・転用硯、珠洲焼摺鉢・壺、龍泉窯系青磁、銅製帯金具（丸鞆）、古銭（寛永通寶）、櫛・箸・曲げ物、軽石製勾玉、砥石・炭化米。	俗説に寺院跡とされていた所である。調査の結果、遺構は土坑と溝が主体的であり、寺院跡に関わる遺構は今回確認されなかった。土坑のなかには井戸跡と考えられるものよりまとまって箸状木製品が、遺物包含層より多量に須恵器甕の破片が出土している。 時期は9世紀代の所産である。中でも銅製帯金具（丸鞆）・炭化米の出土は遺跡の性格を知る上で重要なものである。 地震による噴砂跡が確認され地震考古学の好資料となっている。

# 目 次

序文	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の方法と経過	2
第1節 試掘調査の概要	2
第2節 本調査	5
第1項 調査の方法	5
第2項 調査の経過	5
第3節 整理調査	6
第4章 基本層序	9
第5章 検出された遺構と遺物	9
第1節 遺構	9
第1項 土坑	12
第2項 小ピット	15
第3項 溝	15
第2節 遺物	18
第6章 まとめ	28
第7章 自然科学分析	36
第1節 観音寺遺跡出土の炭化米について	36
第2節 観音寺遺跡で検出された液状化跡	37

# 挿 図 目 次

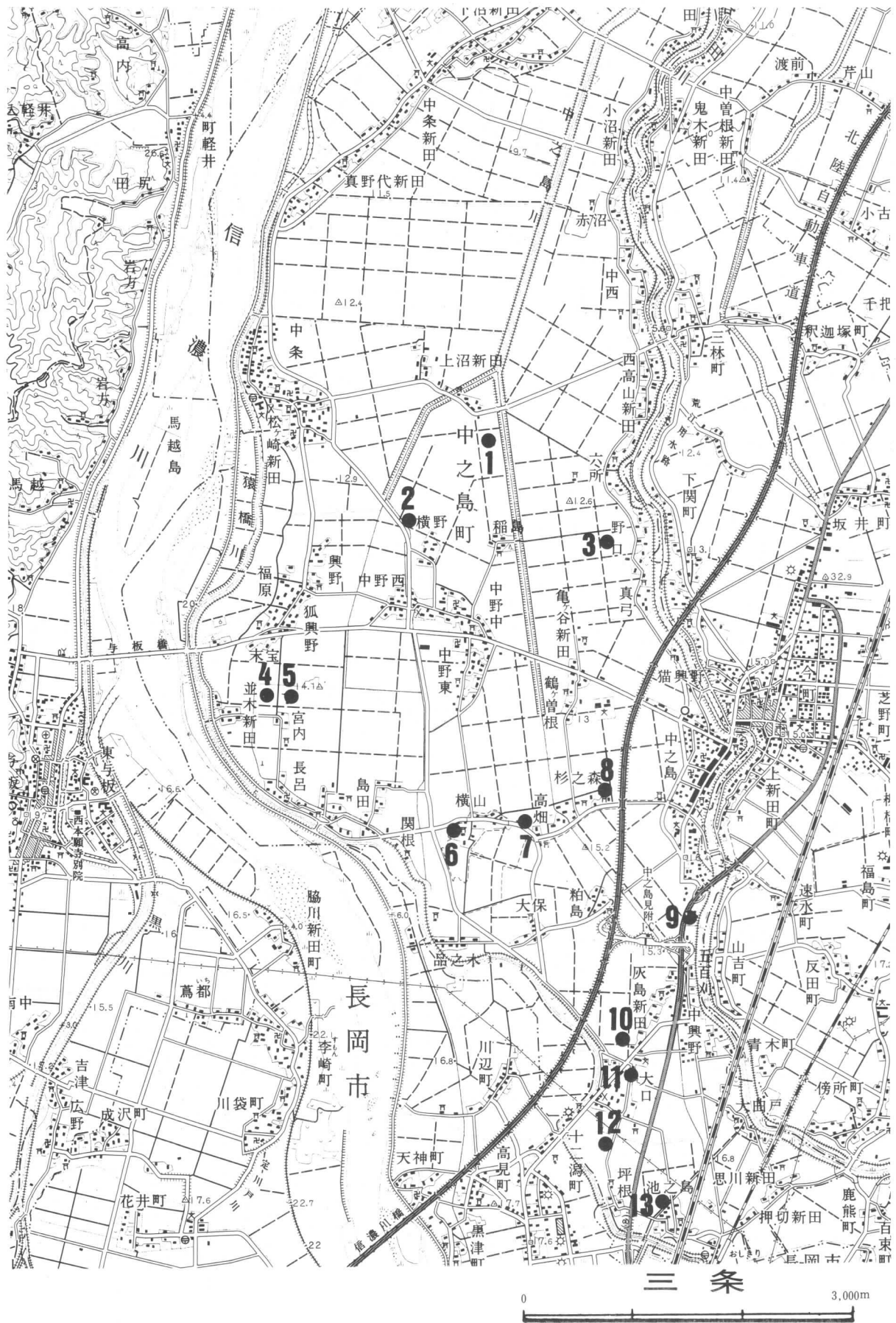
第1図 観音寺遺跡と周辺の遺跡	序	第9図 3号土坑出土遺物	20
第2図 確認調査トレンチ設定図	4	第10図 11～13号土坑出土遺物	21
第3図 遺跡位置図	7	第11図 13～35号土坑出土遺物	22
第4図 遺構配置図	8	第12図 35・37号土坑、2・4・5号溝出土遺物	23
第5図 基本土層図	9	第13図 8号溝、グリッド出土遺物(1)	24
第6図 土坑(1～4・6～8・10・11号土坑)	10	第14図 グリッド出土遺物(2)	25
第7図 土坑(12～15・17・22・23・26・28 ・35～38号土坑)	11	第15図 グリッド出土遺物(3)	26
第8図 溝	16	第16図 グリッド出土遺物(4)	27
		第17図 グリッド出土遺物(5)	28

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡	2	第9表	37号土坑出土遺物観察表	33
第2表	小ピット一覧	15	第10表	2号溝出土遺物観察表	33
第3表	3号土坑出土遺物観察表	31	第11表	4号溝出土遺物観察表	33
第4表	11号土坑出土遺物観察表	31	第12表	5号溝出土遺物観察表	33
第5表	12号土坑出土遺物観察表	31	第13表	8号溝出土遺物観察表	33
第6表	13号土坑出土遺物観察表	31	第14表	グリッド出土遺物(1)	33
第7表	28号土坑出土遺物観察表	32	第15表	グリッド出土遺物(2)	34
第8表	35号土坑出土遺物観察表	32	第16表	グリッド出土遺物(3)	35

## 写真図版目次

図版1	調査前全景(南より)・遺跡遠景	図版9	3号土坑出土遺物
図版2	遺跡と周辺の現況地形(北より) 遺跡遠景	図版10	11~13号土坑出土遺物
図版3	2号土坑・3号土坑・8号土坑・9号土坑・ 12号土坑遺物出土状況・同近影・同近影・ 12号土坑検出状況	図版11	13・28・35号土坑出土遺物
図版4	10号土坑・13号土坑・同箬状木製品出土状 況・13号土坑完掘状況・17号土坑・26号土 坑・28号土坑・38号土坑	図版12	32・37号土坑、2・4・5・8号溝出土遺物
図版5	35号土坑遺物出土状況・35号土坑・37号土 坑・同遺物出土状況・同遺物出土状況・1 号溝・5号溝A・B(右A・左B)・6号溝	図版13	8号溝・グリッド出土遺物(1)
図版6	7号溝・8号溝・調査区南部溝配置状況・ 9号溝・5号溝下遺物包含層(A-1G)	図版14	グリッド出土遺物(2)
図版7	包含層遺物出土状況(A-1・2G)同近 影・(A-1G)・包含層遺物出土状況(B- 2G)・同近影・同近影・同近影・同近影・ 同近影	図版15	グリッド出土遺物(3)
図版8	包含層遺物出土近影(C-3G)・同(C-4 G)・同(D-2G)・同(D-3G)・同(D- 3G)・遺物包含層調査状況(D・E-9・ 10G)・遺物出土近景(D-9G)・基本土層	図版16	グリッド出土遺物(4)
		図版17	グリッド出土遺物(5)



第1図 観音寺遺跡と周辺の遺跡

## 第1章 調査に至る経緯

観音寺遺跡は、中之島町大字上沼新田集落より東南約200メートル、中之島町の中央部を流れる排水幹線「中之島川」左岸沿いに位置し、「中之島村史」によると昭和初年に水路工事を行った際に遺物が出土したという記述がある。

その後昭和47年に遺跡分布調査が行なわれ新潟県教育委員会が作成している遺跡分布地図における遺物包蔵地として登録された。現地は昭和20年後半に土地改良事業が実施され水田として利用されている。

このたび同遺跡が県営広域営農団地農道整備事業南蒲原南部地区と県営湛水防除事業中之島地区法線内にあたることから県教育庁文化課の指導を仰ぎ、平成6年1月11日、同年2月24、25日の3日間にわたり、県教育庁文化行政課の木村文化財専門員、小野塚文化財専門員、塩路文化財専門員による遺跡確認のための発掘調査を実施した。

確認調査の結果、多数の平安時代の土器が出土したため町教育委員会は県教育庁文化行政課と遺跡の取扱について協議し、遺跡の一部の本調査を行なうこととなった。

調査は中之島町教育委員会が主体となり、県教育庁文化行政課の指導のもとに県農地部農地整備課及び三条農地事務所の全面的な援助協力により県営広域営農団地農道整備事業及び県営湛水防除事業として平成6年7月より発掘調査を実施することとなった。

発掘作業は発掘担当者に千葉県成田市山武考古学研究所より近江屋成陽調査研究員を招へいし、中之島町老人クラブ連合会の協力を得て進められることとなった。

## 第2章 遺跡の位置と環境

観音寺遺跡(1)の所在する中之島町は北緯37度30分から同34分、東経138度49分から同54分の間で南北に長い長方形に広がり、南蒲原郡の南西部にあたる。東側は刈谷田川、西側を信濃川に挟まれる三角州状の沖積地となっており有数の穀倉地帯として全国にその名を馳せている。

標高は南部の最高位で15.1m、北の最低位で9.1mと、町全体はほぼ平坦である。遺跡はこの町のほぼ中央部、上沼新田に位置している。

昭和元年に調査区外東側に流れる用水路工事の時に桶を出土したと伝えられる地点で、一説に寺院跡といわれている。遺跡の周辺では古墳時代から遺跡の分布が見られる。しかし、確認されている資料の大部分が表面採集であり、発掘例としては本遺跡南約2.5kmの杉之森遺跡1例のみである。以下時代別に概観する。

### 古墳時代

本遺跡の南約2.5kmに位置する杉之森から高畑にかけては、標高15.5m前後の帯状の微高地を形成し、周囲の低地との比高は50cm～1m前後を計る。この付近一帯(6・7)には、広く土師器が散布し、一連の遺跡であると考えられている。杉之森遺跡(8)では昭和50年に北陸自動車道建設に先行して、新潟県教育委員会が発掘調査を行なっている。発見された遺構は中世所産のものであり、古墳時代の遺物は遺構外からの検出であった。出土遺物は古墳時代前期に比定されるものであった。高畑遺跡(7)では古墳時代中期の土師器片が採集されている。また、町の南部大口地内(11)の微高地上では古墳時代後期の土師器甕の破片が採集されている。

## 奈良・平安時代

大口地内(11)の微高地上ではロクロ土師器の長胴甕の破片、須恵器甕の破片が採取されている。また、町の南端部池之島地内(13)の微高地上では平安前期頃に位置づけられる須恵器坏・甕の破片が採取されている。

杉之森遺跡(8)で中世の陶質土器を伴う土坑、溝が検出されている。その他、本遺跡南西約500mの横野地内(2)は昭和33年頃に鉦滓が出土したといわれ、城跡だという説もある。以上中之島町は発掘調査例が少ないのと、町内の約64.3%の26.87km<sup>2</sup>が水田で、表面採取が不可能な土地柄である。したがって、埋蔵文化財については現在のところ不明な点が多い。今後の発掘調査及びその成果が待たれるところである。

第1表 周辺の遺跡

1	観音寺遺跡	平安～室町時代に亘る須恵器・土師器が多数・銅製丸駒出土。俗説に寺院跡	2	カジヤシキ	昭和33年鉦滓の出土。地俗説に城跡。
3	野口	古銭の出土地	4	古宮	鞍掛神社の旧地か。陶質土器出土。
5	宮内館跡	館跡	6	横山遺跡	陶質土器出土。
7	高畑遺跡	古墳時代前期の高坏・甕出土。	8	杉之森遺跡	北陸月影式並行期・古墳前期甕出土。
9	藤十郎散布地	土師器散布地。	10	居掛包蔵地	土師器・須恵器散布地。
11	大口遺跡	古墳時代の甕、平安時代の土師器甕・須恵器甕出土	12	坪根散布地	土師器・須恵器散布地。
13	池乃島遺跡	平安時代前期の須恵器坏・甕出土。			

参考文献『中之島村誌』上巻 昭和63年3月

## 第3章 調査の方法と経過

### 第1節 試掘調査の概要

#### 1. 調査期間

平成6年1月11日 (1次)

平成6年2月24日～25日 (2次)

#### 2. 調査主体

中之島町教育委員会教育長 古塩 正

事務局 中之島町教育委員会生涯学習推進課 渡辺一司

#### 3. 調査体制

##### 1次調査

調査担当 木村 康裕 (新潟県教育庁文化行政課文化財専門員)

調査員 小野塚徹夫 (新潟県教育庁文化行政課文化財専門員)

##### 2次調査

調査担当 小野塚徹夫 (新潟県教育庁文化行政課文化財専門員)

調査員 塩路 真澄 (新潟県教育庁文化行政課文化財専門員)

#### 4. 開発対象面積

165,456m<sup>2</sup>

#### 5. 試掘調査面積

76m<sup>2</sup> (1次)

9 6 m<sup>2</sup> (2次)

## 6. 調査方法

調査対象地区内にトレンチを任意に設定し、バックホー及び人力による掘削・精査を行ない、遺構、遺物の有無を確認した。

## 7. トレンチの規模

1～6・8～12トレンチ (2×3 m)

7トレンチ (2×5 m)

## 8. 調査の結果

土地所有者の承諾の関係で2回に分けて試掘調査を実施した。調査の結果は以下の通りである。

### 1次調査

遺構 1・5・7・8トレンチより溝が確認された。

遺物 1トレンチ・・・土師器片55点・須恵器片3点 (遺構中)

2トレンチ・・・土師器片1点

3トレンチ・・・土師器片3点・須恵器片4点

4トレンチ・・・土師器片1点

5トレンチ・・・土師器片1点

7トレンチ・・・土師器片1点・骨片1点 (遺構中)

8トレンチ・・・土師器片1点

10トレンチ・・・土師器片1点

12トレンチ・・・土師器片1点

### 2次調査

#### 遺構

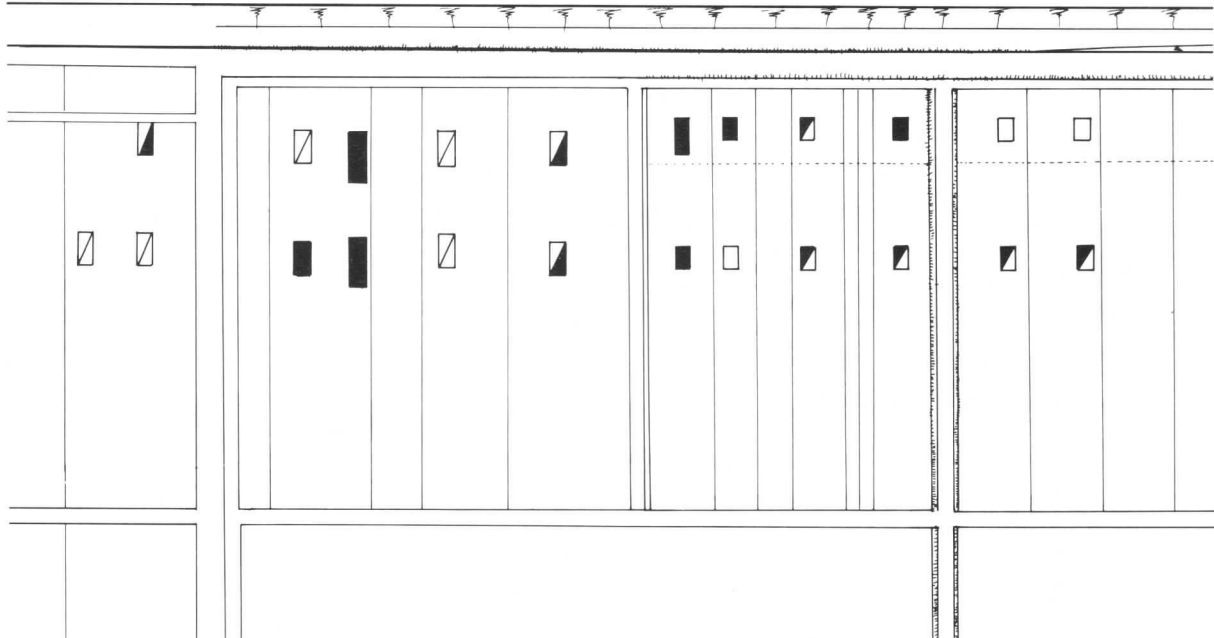
1トレンチで南面の土層に溝らしき落ち込みが検出されるが、遺構中から遺物は発見されていない。2トレンチでは浅い落ち込みの一部が発見されている。覆土はIII層であり、遺物は発見されていない。5トレンチでは地震によるものと思われる噴砂の跡が溝状にみられた。また、同一の確認面上で、噴砂の西側の黒灰色粘質土の中からまとまって遺物が出土している。遺構の形状は不明確である。6トレンチの西側には遺構確認面上に焼骨、炭化物が入った土坑が発見されている。骨片、炭化物が直径40cmのほぼ円形に集中し、その周辺に、赤褐色の炭化物を含む土がわずかに広がっていた。8トレンチでは南北方向に延びる溝が発見されている。幅60cm、深さ35cm、覆土は灰褐色シルト層で、溝中から遺物は発見されていない。9トレンチでは暗渠排水に切られている溝 (灰褐色粘土の覆土) がわずかにあらわれている。しかし遺物の出土もなく詳細は不明である。

#### 遺物

5トレンチで須恵器片42・土師器片36、6トレンチで須恵器片69・土師器片30、8トレンチで須恵器片5・土師器片2がそれぞれ出土している。



- .....調査トレンチ
- ▨.....遺物出土トレンチ
- ▩.....遺構出土トレンチ
- .....遺構出土トレンチ



第2図 確認調査トレンチ設定図 (1:500)

## 9. まとめ

観音寺遺跡は「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」では、室町時代の遺跡とされている。現状は一面平らな水田であるが、遺跡の立地としては、信濃川・刈谷田川に挟まれた微高地になるものと思われる。

1次調査では、性格は不明であるが、4つの試掘坑から溝が検出された。出土遺物より、古代のものと思われる。また、遺物も9つの試掘坑から、土師器片、須恵器片が出土している。いずれも、暗灰色粘土（III層）・遺構覆土から出土しているものである。暗灰色粘土層が包含層に当たるものと思われる。「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」では、過去に中世陶質土器が出土しているが、今回の出土品は、古代の土器に限られた。今回の調査結果から、当遺跡については、時代は古代に遡り、北西方面に広がるものと思われる。

2次調査では1・2・9トレンチでは遺物も出土せず、遺構の性格については不明である。しかし5・6・8トレンチで発見された遺物はいずれもIII層の黒灰色粘質土（1次調査では暗灰色粘質土となっている。）からの出土である。所々過去に行われた土地改良事業の削平・客土が見られるが、6トレンチの墓壙と思われる遺構、及び5・8トレンチの遺物が出土したレベルまでは攪乱されていないと思われる。

遺構は明確なものなかったものの、遺物は部分的に集中して発見できる。よって、1次調査、2次調査の試掘の結果を合わせて、トレンチ設定図に示した範囲（約2,300㎡）において本調査が必要であると考えられる。

（観音寺遺跡確認調査報告書より）

## 第2節 本調査

### 第1項 調査の方法

試掘調査に基づき、本調査区を設定し耕作土下の灰褐色粘土層及び、遺物包含層の存在する北端部と南端部については、黒灰色粘土層まで表土排土を行なった。その後、低湿地帯での調査の為、雨水対策の一環として、調査区内の周囲に暗渠排水設置工事を行なった。平行して方眼グリッド法を用い、調査区内に国家座標第IX系に従い10mの方眼を被せた。グリッドはX軸がアラビア数字、Y軸がアルファベットをあてて、方眼の交点にグリッド杭を設定した。基点は北西隅とし、A-1グリッドと呼称し、順次番号を付した。

土坑・小ピットは半截し、溝はベルトを残しそれぞれ覆土の観察を行なった後に、掘り下げを行なった。遺物包含層はグリッドごとにベルトを残し、堆積状態を観察しながら掘り下げを行なった。

実測は公共水準、公共座標を基準に行ない、土層断面図を20分の1の縮尺、平面図は土坑・小ピット・包含層遺物分布を20分の1の縮尺、溝は40分の1の縮尺、全測図を200分の1の縮尺で作製した。

写真撮影は白黒35mm、カラースライド35mm、カラーネガタイプ35mm、白黒ブローニー6×7を使用し、調査の状況に応じて撮影を実施した。

### 第2項 調査の経過

#### 7月期

- 中旬 15日 プレハブの設置を行なう。18日 残土運搬の為、搬出路の鉄板敷き設置作業を行なう。  
19日 表土排土作業を開始する。20日 発掘機材の搬入。  
下旬 26日 表土排土終了。27日 雨水対策で調査区内の周囲に暗渠の新設工事を行う。  
30日 暗渠工事を終了する。

#### 8月期

- 上旬 1日 作業員を導入し、遺構確認作業を開始する。(～4日) 2日 方眼杭打ち、BMの設定を行う。併行して暗渠新設工事及び、実測を行う。5日 溝の掘り下げを開始する。  
中旬 盆休み(10日～16日)。17日 溝・土坑の掘り下げ。併行して写真撮影を行う。  
下旬 20日 溝・土坑・小ピットの掘り下げ、写真撮影、実測を行う。22日 本日より遺物包含層の掘り下げを開始する。

#### 9月期

- 上旬 11・12・13号土坑は調査の結果、井戸である可能性が強いことが判明した。11・13号より木製の箸、井戸枠に使われたと考えられる板材、須恵器甕の破片が出土する。また、12号より帯金具(銅製の丸鞆)が1点出土した。  
中旬 遺構の掘り下げをほぼ終了する。35・37号土坑より炭化米が出土する。併行して遺物包含層の掘り下げ、写真撮影、実測を行なう。  
下旬 台風の影響の為、降雨が続く。30日 午後より一般を対象に現地説明会を行う。

#### 10月期

- 上旬 1日 遺物包含層遺物分布実測、全体測量開始する。併行して遺構内の雨水の汲み出し作業を行なう。3日 空撮の為清掃を行い併行して全体測量を行なう。4日 空撮を行なう。空撮後、35号土坑の写真撮影を行なう。13号土坑の調査を再開する。併行して写真撮影、実測

を行なう。地震研究家・寒川旭氏来跡。

6日 溝平面図、遺物包含層土層断面の実測を、写真撮影、セクションベルトの除去作業を行なう。出土遺物の搬出準備を行なう。

7日 地元小学生120名を対象に現地説明会を行なう。土坑平面図・遺物包含層土層断面・基本土層の実測、写真撮影を行なう。終了全景写真撮影を行なう。

出土遺物・発掘器材の搬出をもって、すべて現地調査の工程を終了する。

### 第3節 整理調査

整理調査は、平成6年11月より平成7年2月末日までの間、実働2カ月で実施した。

出土遺物はすべて洗浄を行なった。注記は注記可能な大きさのものはすべて実施した。また、注記不可能な細片については遺物収納袋に記載した。

遺物の復元は可能な限り行い、必要に応じて樹脂を用いた。さらに大甕1点は(株)武蔵野文化財修復研究所に委託し復元を行なった。また、銅製の帯金具(丸鞆)の保存処理についても(株)武蔵野文化財修復研究所に委託した。土坑内より検出された炭化米の同定についてはパリノ・サーヴェイ(株)に委託した。

遺物の実測及び写真撮影は報告書に使用するもののみについて行なった。遺物の実測は原寸で行い、須恵器の破片は拓本を用いた。遺物の版組は1/4を原則とし、必要に応じて1/1とした。

遺構図面は平面図と土層断面図及び断面図の修正を行ない、トレースを行なった。

遺物・写真・図面・日誌類の資料は各々、台帳を作成した。

整理調査の経過内容は以下の通りである。

平成6年11月

上旬 遺物水洗い及び遺構図面修正

中旬 遺物注記 接合・復元

下旬 報告書掲載用遺物の選別及び未使用分の破片点数調査。併行して遺物実測。原稿執筆。

平成7年2月

上旬 遺物実測。併行して終了したものより見直し、トレース・拓本。遺構トレース。遺構写真図版の版組。遺物写真撮影。原稿執筆。

中旬 遺構図面・遺物図面の版組。原稿執筆。

下旬 見直し 入稿。残務整理。



第3図 遺跡位置図

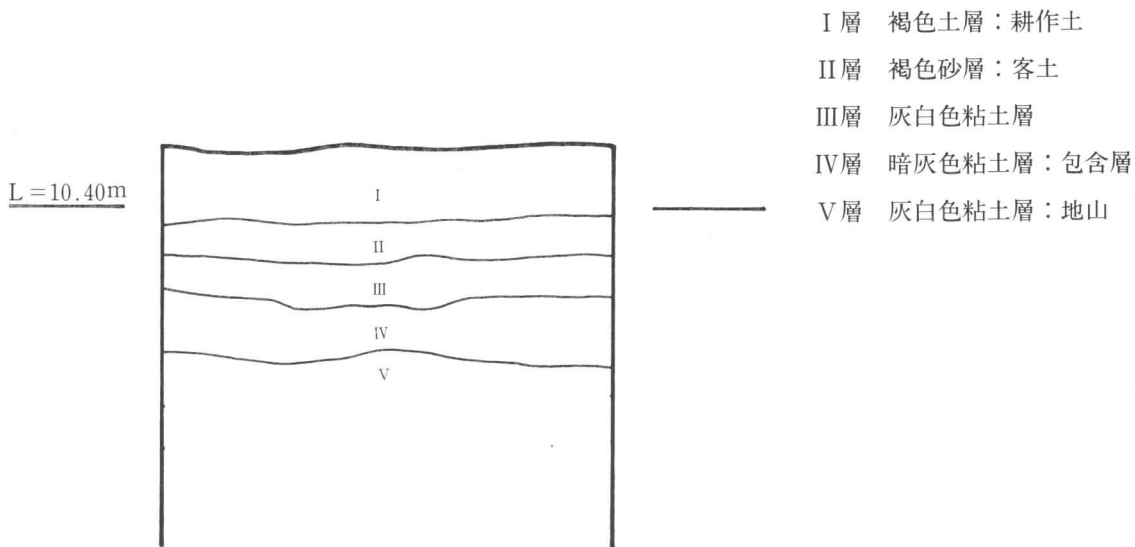


第4図 遺構配置図

## 第4章 基本層序

調査区や周辺の現況は水田である。昭和27年の耕地整理により水田化され旧地形が削平を受けている。調査区内の基本層序は地山まで5層に分層される。I層は褐色土層で耕作土である。II層は褐色砂層で客土である。III層は灰白色粘土層で鉄分により全体に赤味を帯びる。IV層は暗灰色粘土層で土師器・須恵器の破片を含む、所謂遺物包含層である。上層の耕作土により削平を受ける部分も観察される。調査区の北側と南側の端部に検出された。本層で遺構確認を行ない、調査の後、地山までは慎重に掘り下げを進めた。V層は灰白色粘土層の地山である。包含層が確認されなかった中央部の遺構確認は本層上面で行なった。

なお、調査区の数か所に地震による噴砂の跡が土層に認められ、噴砂の跡はIII層に切られIV層、V層を切っている様子が観察される。



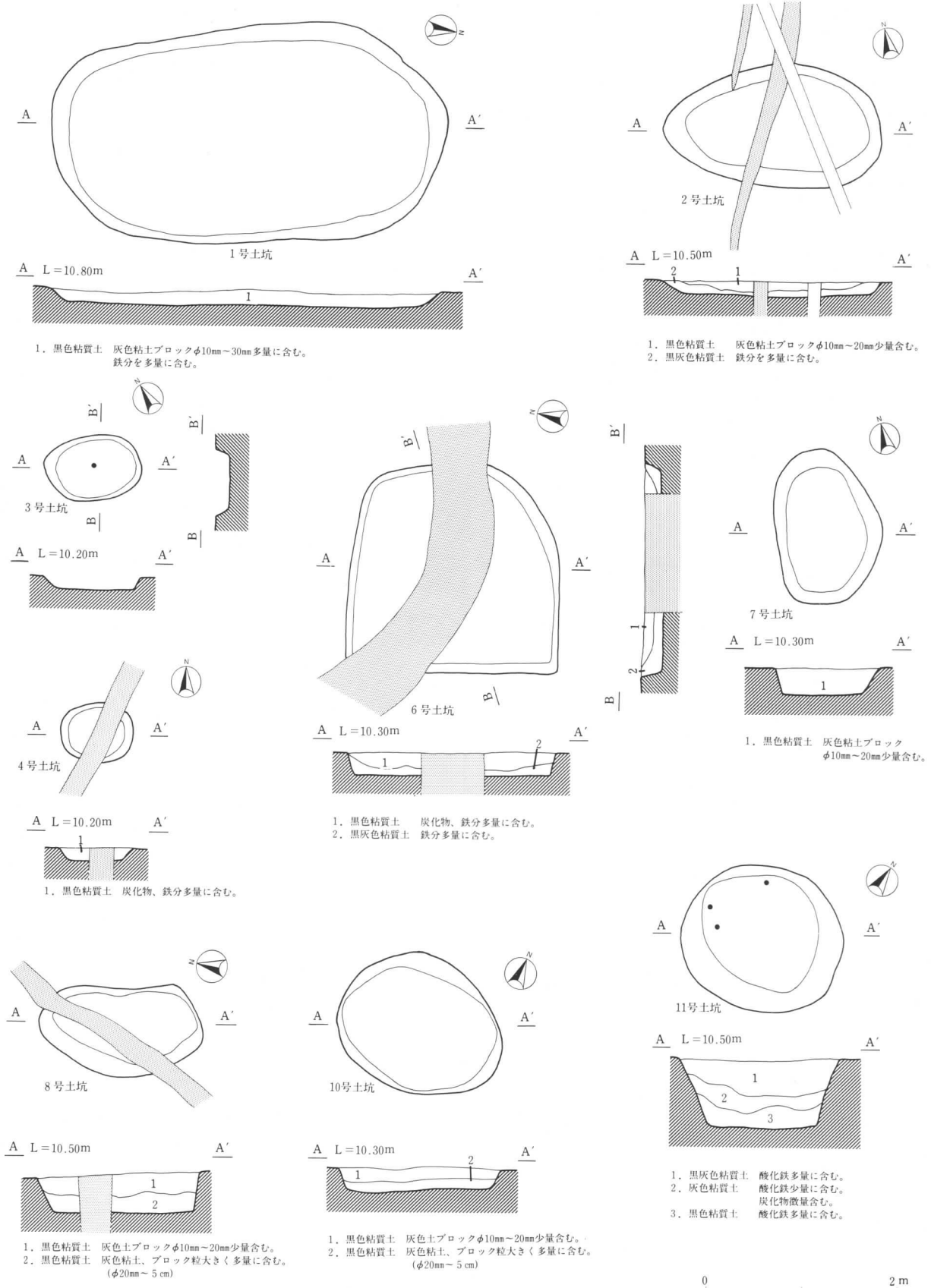
第5図 基本土層図

## 第5章 検出された遺構と遺物

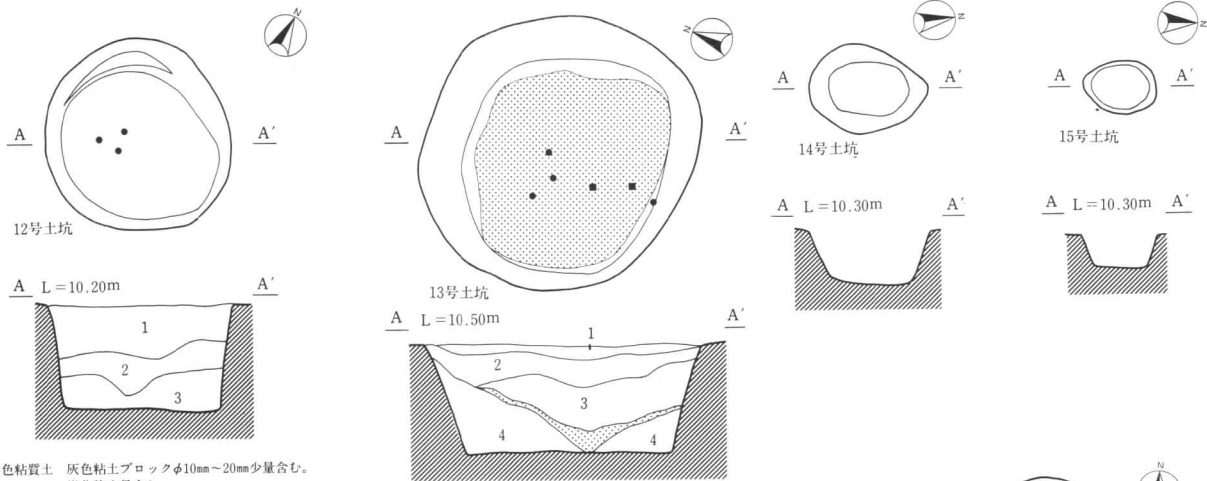
### 第1節 遺構

本遺跡は、広義的には信濃川の沖積地上に、狭義的には苧谷田川沿いに形成された微高地（自然堤防）上に立地するものと思われる。周辺は標高11mを測る低地である。

調査では古代から中世に亘る遺構・遺物が検出された。遺構は土坑・小ピット・溝が検出された。土坑は調査区の中央部に集中して検出する傾向を示し、小ピットは調査区中央部に散在して検出され、掘立柱建物跡のように規則的に並ぶものはみられなかった。溝は調査区の東西を貫流するものと、北西から南東方向へ走向するもの、調査区の北西端に2条が並行して走向するものの3群に分かれる傾向を示した。遺物は遺構

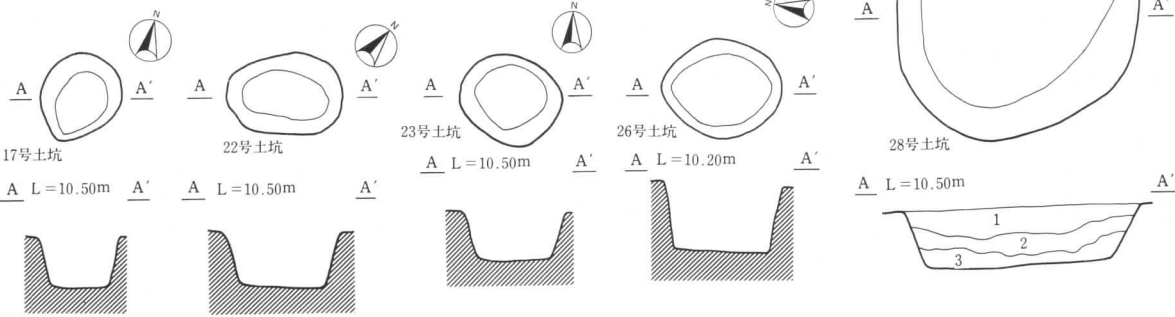


第6図 土坑(1~4・6~8・10・11号土坑)

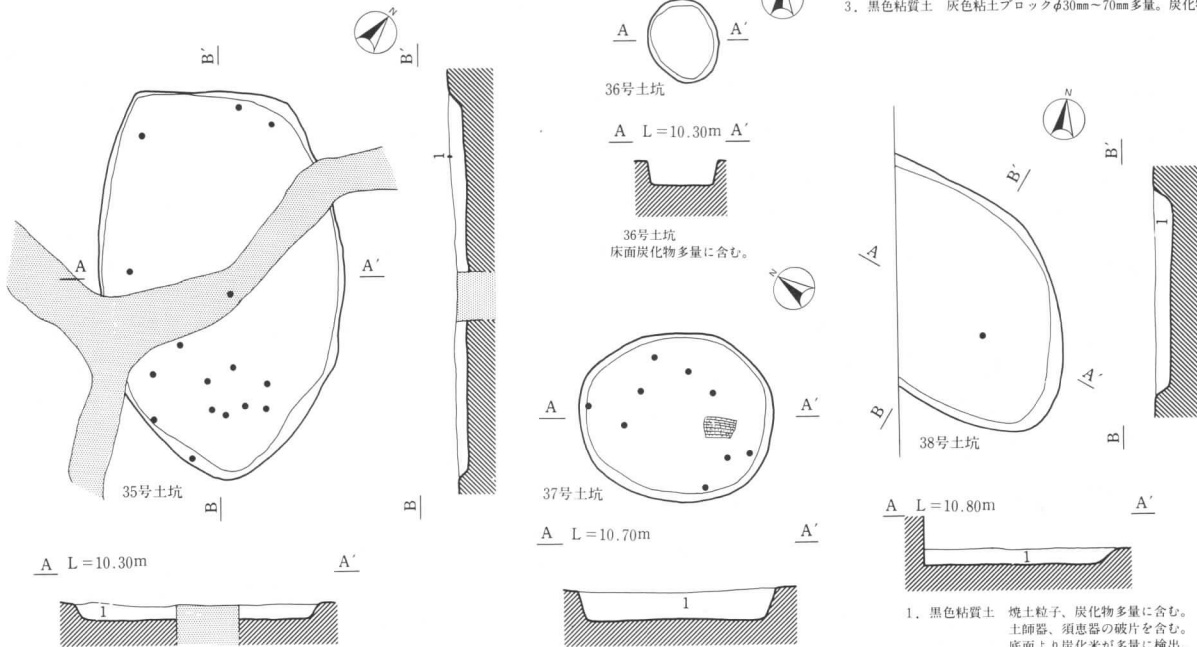


1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量含む。炭化物少量含む。
2. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~50mm少量含む。炭化物少量含む。
3. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~30mm。炭化物多量に含む。

1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量含む。炭化物少量含む。
2. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~50mm少量含む。炭化物少量含む。
3. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~30mm。炭化物多量に含む。
4. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ30mm~70mm多量に含む。



1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量。炭化物多量に含む。
2. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ30mm~50mm少量。炭化物多量に含む。
3. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ30mm~70mm多量。炭化物多量に含む。



1. 全体に焼け、焼土、炭化材が底面を覆っていた。中より炭化米検出、床面炭化物多量に含む。

1. 黒色粘質土 焼土粒子、炭化物多量に含む。土師器、須恵器の破片を含む。底面より炭化米が多量に検出。

1. 黒色粘質土 焼土粒子、炭化物多量に含む。土師器、須恵器の破片を含む。底面より炭化米が多量に検出。



第7図 土坑 (12~15・17・22・23・26・28・35~38号土坑)



内と調査区北部と南部の傾斜地に堆積する黒色粘土層より検出された。遺構は伴う遺物の出土がみられるものが少なく、時代別に判別することが困難なため、現地で付した遺構番号順に掲載した。なお、調査の結果、9・16・18～21・24・25・29・30～32号土坑と付したものは遺構でなかったため欠番とした。

## 第1項 土坑

### 1号土坑

**位置** D-9グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸4.16m×短軸2.22m、下端：長軸3.78m×短軸1.99m、深さ0.16m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

### 2号土坑

**位置** D-7グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸2.30m×短軸1.29m、下端：長軸1.89m×短軸0.96m、深さ0.15m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土と黒灰色粘質土のあわせて2層に分層される。地震による噴砂跡に切られる。

### 3号土坑

**位置** D-7グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸1.03m×短軸0.67m、下端：長軸0.84m×短軸0.59m、深さ0.13m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 須恵器甕が覆土中より潰れた状態で出土した。

### 4号土坑

**位置** D-7グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.76m×短軸0.63m、下端：長軸0.57m×短軸0.15m、深さ0.13m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

### 6号土坑

**位置** D-6・7グリッド/**形態** 平面 隅丸長方形 断面 鍋底形/**復元規模** 上端：長軸2.23m×短軸2.16m、下端：長軸2.02m×短軸1.95m、深さ0.23m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土・黒灰色粘質土の合わせて2層に分層される。地震による噴砂跡に切られる。/**遺物** 出土していない。

### 7号土坑

**位置** D-6グリッド/**形態** 平面 隅丸長方形 断面 鍋底形/**規模** 上端：長軸1.62m×短軸1.14m、下端：長軸1.28m×短軸0.85m、深さ0.27m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

### 8号土坑

**位置** C-6グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸1.71m×短軸0.93m、下端長軸1.52m×短軸0.65m、深さ0.19m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土

していない。

#### 10号土坑

**位置** C-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸1.77m×短軸1.42m、下端：長軸1.55m×短軸1.17m、深さ0.25m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 11号土坑

**位置** D-5・6グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形 /**規模** 上端：長軸1.71m×短軸1.52m 下端：長軸1.22m×短軸0.65m、深さ0.70m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 箸が4点出土している。

#### 12号土坑

**位置** C-6グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸1.52m×短軸1.47m、下端：長軸1.23m×短軸1.65m、深さ0.79m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 銅製丸靴・珠洲焼摺鉢・壺が出土している。

#### 13号土坑

**位置** C-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 逆台形/**規模** 上端：長軸2.21m×短軸2.13m、下端：長軸1.68m×短軸1.61m、深さ0.83m。/**覆土の状況** 自然堆積である。黒色粘質土を基調に4層に分層される。/**遺物** 覆土中より須恵器甕の破片、両口箸・櫛・曲げ物・不明板材が出土している。/**調査所見** 底面より水が湧き、形態から井戸の可能性が考えられる。

#### 14号土坑

**位置** C-5グリッド/**形態** 平面 楕円形、断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.93m×短軸0.70m、下端：長軸0.63m×短軸0.40m 深さ0.42m。/**覆土の状況** 自然堆積である。黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 15号土坑

**位置** D-6グリッド/**形態** 平面 楕円形、断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.58m×短軸0.42m、下端：長軸0.44m×短軸0.34m 深さ0.25m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 17号土坑

**位置** B-5グリッド/**形態** 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.70m×短軸0.62m、下端：長軸0.51m×短軸0.37m、深さ0.37m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 22号土坑

**位置** B-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.92m×短軸0.64m、下端：長軸0.68m×短軸0.35m 深さ0.41m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 23号土坑

**位置** B-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸0.84m×短軸0.76m、下端：長軸0.58m×短軸0.49m。深さ0.38m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 26号土坑

**位置** C-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形/**規模** 上端：長軸0.95m×短軸0.79m、下端：長軸0.78m×短軸0.56m、深さ0.55m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 27号土坑

**位置** D-6グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形/**規模** 上端：長軸1.62×短軸1.14m、下端：長軸1.28m×短軸0.88m 深さ0.27m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

#### 28号土坑

**位置** B-5グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸2.07m×短軸1.85m、下端：長軸1.62m×短軸1.35m 深さ0.47m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 曲げ物・軽石が出土している。

#### 35号土坑

**位置** C-2・3グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 皿形/**規模** 上端：長軸3.08m×短軸1.95m、下端：長軸2.93m×短軸1.87m 深さ0.10m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 土師器坏・小型甕・須恵器坏・長頸瓶・甕・蓋（転用碗）炭化米が出土している。

#### 36号土坑

**位置** B-2グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形/**規模** 上端：長軸0.66m×短軸0.55m、下端：長軸0.57m×短軸0.48m、深さ0.19m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。覆土下層に炭化米を含む。

#### 37号土坑

**位置** B-2グリッド/**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形/**規模** 上端：長軸1.54m×短軸1.34m、下端：長軸1.41m×短軸1.22m、深さ0.18m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物**

覆土下層に炭化米を含む。

### 38号土坑

**位置** A・B-5グリッド／**形態** 平面 楕円形 断面 鍋底形／**規模** 上端：長軸1.59m+ $\alpha$ ×短軸1.54m、下端：長軸1.53m+ $\alpha$ ×短軸1.64m、深さ0.13m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 出土していない。

## 第2項 小ピット

小ピットはD5～D6グリッド、C5～6グリッド間に集中して検出された。合計11基検出されたが、規模・方向・ピット間などから建物として成立するものはみられなかった。

第2表 小ピット一覧

(m)

番号	位置	径(長軸×短軸)	深さ	平面	断面	備考
1	C-5G	0.25 × 0.18	0.20	楕円形	鍋底形	覆土：黒色粘質土
2	C-5G	0.25 × 0.23	0.18	楕円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
3	C-5・6G	0.48 × 0.32	0.20	楕円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
4	C-6G	0.40 × 0.32	0.25	円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
5	C-5G	0.44 × 0.31	0.12	円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
6	C-5G	0.31 × 0.24	0.16	円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
7	C-6G	0.23 × 0.19	0.25	楕円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
8	C-5G	0.40 × 0.32	0.31	楕円形	逆台形	覆土：黒色粘質土
9	C-5G	0.40 × 0.32	0.43	楕円形	逆台形	11号土坑を切る。覆土：黒色粘質土
10	A・B-5G	0.43 × 0.32	0.31	楕円形	鍋底形	覆土：黒色粘質土
11	D-4G	0.42 × 0.32	0.25	楕円形	逆台形	覆土：黒色粘質土

## 第3項 溝

溝は水が流れた痕跡が認められ、排水路として使用されたことが推定される。また、2条平行して走行する5号溝A・Bは覆土の状況や形態の似ているところから同時期の存在が考えられる。2・3・4・10号溝について同走行であり、覆土（黒色粘質土）も同じ事から性格的にも関連するであろう事が窺われるが、調査区が東西に狭いため明確でない。性格についても確定できるだけの資料を得ていない。

### 1号溝

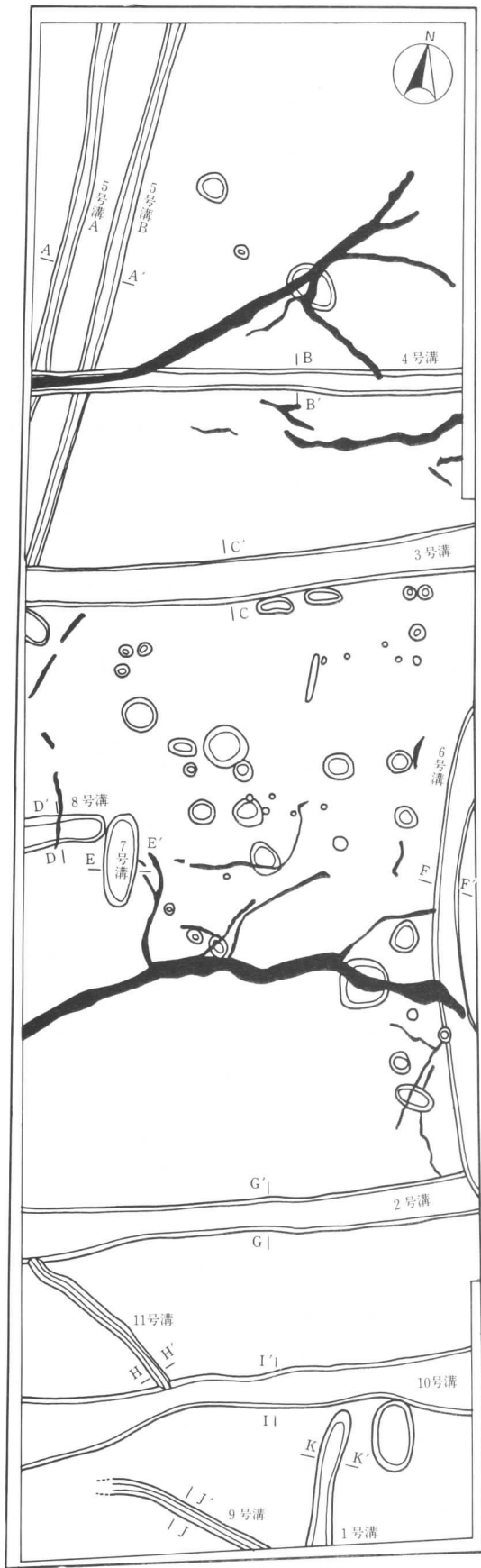
**位置** D-9・10グリッド／**方向** 南北方向、南は調査区外へ延びる。／**規模** 長さ7.89m+ $\alpha$ m、幅1.18m～1.48m、深さ0.16～0.35m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 出土していない。

### 2号溝

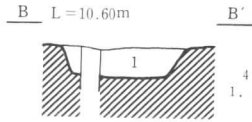
**位置** B・C・D-8グリッド／**方向** 東西方向、東西両端は共に調査区外へ延びる。／**規模** 長さ26.90m+ $\alpha$ m、幅1.80m～3.30m、深さ0.16～0.21m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 覆土中より流れ込んだ状態で軽石製の勾玉が1点出土している。

### 3号溝

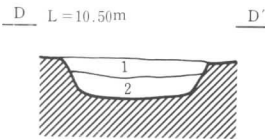
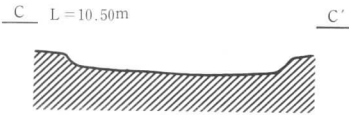
**位置** B・C・D-4グリッド／**方向** 東西方向。東西両端は共に調査区外へ延びる。／**規模** 長さ26.40



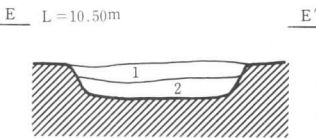
5号溝 A、B  
1. 暗褐色粘質土 鉄分を多量に含む。  
炭化物少量含む。



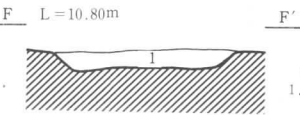
4号溝  
1. 黒色粘質土 鉄分を多量に含む。



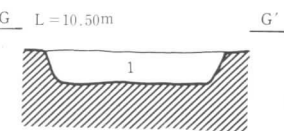
8号溝  
1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量含む。  
鉄分多量に含む。  
2. 黒色粘質土 灰色粘土ブロック多量に含む。φ20mm~50mm  
鉄分多量に含む。



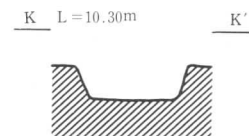
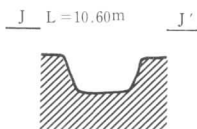
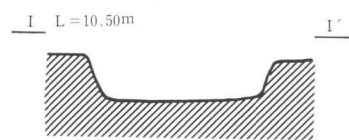
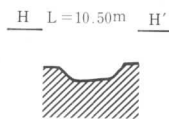
7号溝  
1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量含む。  
鉄部多量に含む。  
2. 黒色粘質土 灰色粘土ブロック多量に含む。φ20mm~50mm  
鉄分多量に含む。



6号溝  
1. 黒色粘質土 鉄分を多量に含む。  
灰色粘土ブロックφ10mm少量含む。



2号溝  
1. 黒色粘質土 灰色粘土ブロックφ10mm~20mm少量。  
鉄分多量に含む。



第8図 溝

m +  $\alpha$ m、幅2.30m~2.80m、深さ0.16~0.21m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 出土していない。

#### 4号溝

**位置** B・C・D-3グリッド／**方向** 東西方向。東西両端は共に調査区外へ延びる。／**規模** 長さ25.3m +  $\alpha$ m、幅1.18m~1.48m、深さ0.16~0.30m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 珠洲焼播鉢が出土している。

#### 5号溝A

**位置** A-1~4グリッド／**方向** 北東から南西方向。5号溝Bと平行。調査区外へ延びる。／**規模** 長さ23.60m +  $\alpha$ m、幅0.70m~1.20m、深さ0.09~0.10m。北東から南西へやや傾斜する。／**覆土の状況** 自然堆積で酸化鉄を多く含む灰色粘質土の単層である。4号溝、地震による噴砂跡に切られる。／**遺物** 覆土中・底面より須恵器甕、壺の破片が出土した。

#### 5号溝B

**位置** A-4グリッド／**方向** 北東から南西方向。5号溝Aと平行。調査区外へ延びる。／**規模** 長さ33.10m +  $\alpha$ m、幅0.70m~1.20m、深さ0.09~0.10m。北東から南西へやや傾斜する。4号溝、地震による噴砂跡に切られる。／**遺物** 出土していない。5号溝AとBは覆土の状況が類似する。

#### 6号溝

**位置** D-5~8グリッド／**方向** 調査区の北東から南東方向。調査区外へ延びる。／**規模** 長さ24m +  $\alpha$ m、幅1.18m~1.48m、深さ0.16~0.21m。北から南方向へ傾斜する。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 木片が出土しているが図示不可能である。

#### 7号溝

**位置** B-6グリッド／**方向** 南北方向。／**規模** 長さ5.14m、幅1.72m~1.90m、深さ0.23~0.36m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 出土していない。

#### 8号溝

**位置** B-6グリッド／**方向** 東西方向。東西共に調査区外へ延びる。／**規模** 長さ4.73m +  $\alpha$ m、幅1.60m~1.95m、深さ0.16~0.21m。／**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。／**遺物** 珠洲焼播鉢・壺が出土している。

#### 9号溝

**位置** C・Dグリッド／**方向** 北西から南東方向。／**規模** 長さ10.30m +  $\alpha$ m、幅0.70m、深さ0.15~0.22m。北東から南西へやや傾斜する。／**覆土の状況** 自然堆積で酸化鉄を多く含む灰色粘質土の単層である。／**遺物** 出土していない。

### 10号溝

**位置** A-1~4グリッド/**方向** 北東から南西方向。5号溝Aと平行。調査区外へ延びる。/**規模** 長さ33.10m+ $\alpha$ m、幅0.52m~0.72m、深さ0.09~0.10m。/**新旧関係** 4号溝、地震による噴砂跡に切られる。/**遺物** 覆土中より須恵器甕の細片が出土している。

### 11号溝

**位置** B-8・9、C-9グリッド/**方向** 調査区の南東から北西方向。/**規模** 長さ11.90m+ $\alpha$ m、幅0.70m、深さ0.17~0.20m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

### 12号溝

**位置** D-7~10グリッド/**方向** 調査区の北東から南東方向。調査区外へ延びる。/**規模** 長さ10m+ $\alpha$ m、幅1.18m~1.48m、深さ0.16~0.21m。/**覆土の状況** 自然堆積で黒色粘質土の単層である。/**遺物** 出土していない。

## 第2節 遺物

遺物は土器が土師器杯・小型甕、須恵器杯・有台杯・蓋・長頸瓶・横瓶・三耳壺・甕、青磁鎚蓮弁文碗、珠洲焼摺鉢・壺、銅製品は丸軋、鉄製品は楔形鉄製品、石製品は軽石製勾玉、木製品は箸・櫛・箱物部材・曲げ物、また炭化米が出土している。

### 土器

土師器杯(29・30・42)ともにロクロ土師器で底部を回転糸切りとする。42は内面を黒色処理される。土師器小型甕は(31・52)ロクロ土師器で口縁部の端部をつまみ上げられる。須恵器杯(32~36・53~60・73)は底部回転ヘラ切り調整のみ見られる。規模は口径11.60~13.60cm、底径6.80~8.70cm、器高2.60~3.70cmのものが多く、36のように容量の深いもの(口径14.00、器高(5.10))もある。73は墨書土器であるが釈文は不明である。須恵器有台杯(1・61~64)は全貌を知り得る資料はない。底径6.60~8.00cmのものが多く。須恵器蓋は(43・65~69)69を除いて摘みはリング状(環状)である。規模は口径14.40~14.80cm、器高3.00~3.10cmにまとめ口縁部端部を丸く屈折する。69は杯蓋ではなく壺蓋である。また、43・67は転用硯である。須恵器長頸瓶(39・46・47)は口縁端部を上・横に摘み出し、胴部下位ががりのないのを特長とする。須恵器横瓶(74)は1点出土している。口縁端部を上・横に摘み出している。須恵器三耳壺は耳のみの出土である。中央に刺突孔を有し外面に刻みを施す。須恵器甕(2~5・14・15・38・40・41・78~92)は今回の調査で最も多く出土している。口縁部は開きが少なく口径28.00~31.20cmを測り口縁端部は上・横に摘み出されるものと大型(91・92)で口縁端部は上下に摘み出され玉縁状の突帯をつけるものがある。甕の整形は外面が叩き、内面が当て具を基本とし、外面にはこれにカキ目を加えるものもある。これらを「叩き：当て具」のパターンに分けると以下ようになる。

1類「格子目：同心円」・2類「平行：平行」・3類「平行：平行→同心円」・4類「格子目：平行→同心円」・5類「平行→カキ目：平行」・6類「平行：平行・同心円」・7類「格子目：放射状→平行」の7

分類されることがわかる。特に3・4類のような内面の当て具は胴部の上位、特に肩部の周辺を同心円とし下位を平行とする使い分けが指摘される。

青磁鎬蓮弁文碗(93)は片切彫りによるもので釉調より龍泉窯系と思われる。珠洲焼摺鉢(12・45・48・94)は口縁部は水平な面を作り出され外に摘み出される。珠洲焼壺(13・49～51)は吉岡編年のT型壺である。珠洲焼の胎土中には海面状骨針が多量に含まれる。

#### 金属器

帯金具の丸鞆(11)である。銅製品で蒲鉾型を呈し長方形の透かしを入れ裏面には帯との接合にリベット状の突起が3カ所見える。銭貨(97)は寛永通寶である。「永」の押え(ゝ)が左に寄り、「寶」の王が右下がりとなるのを特長とする。鉄製品(96)は楔であろう。

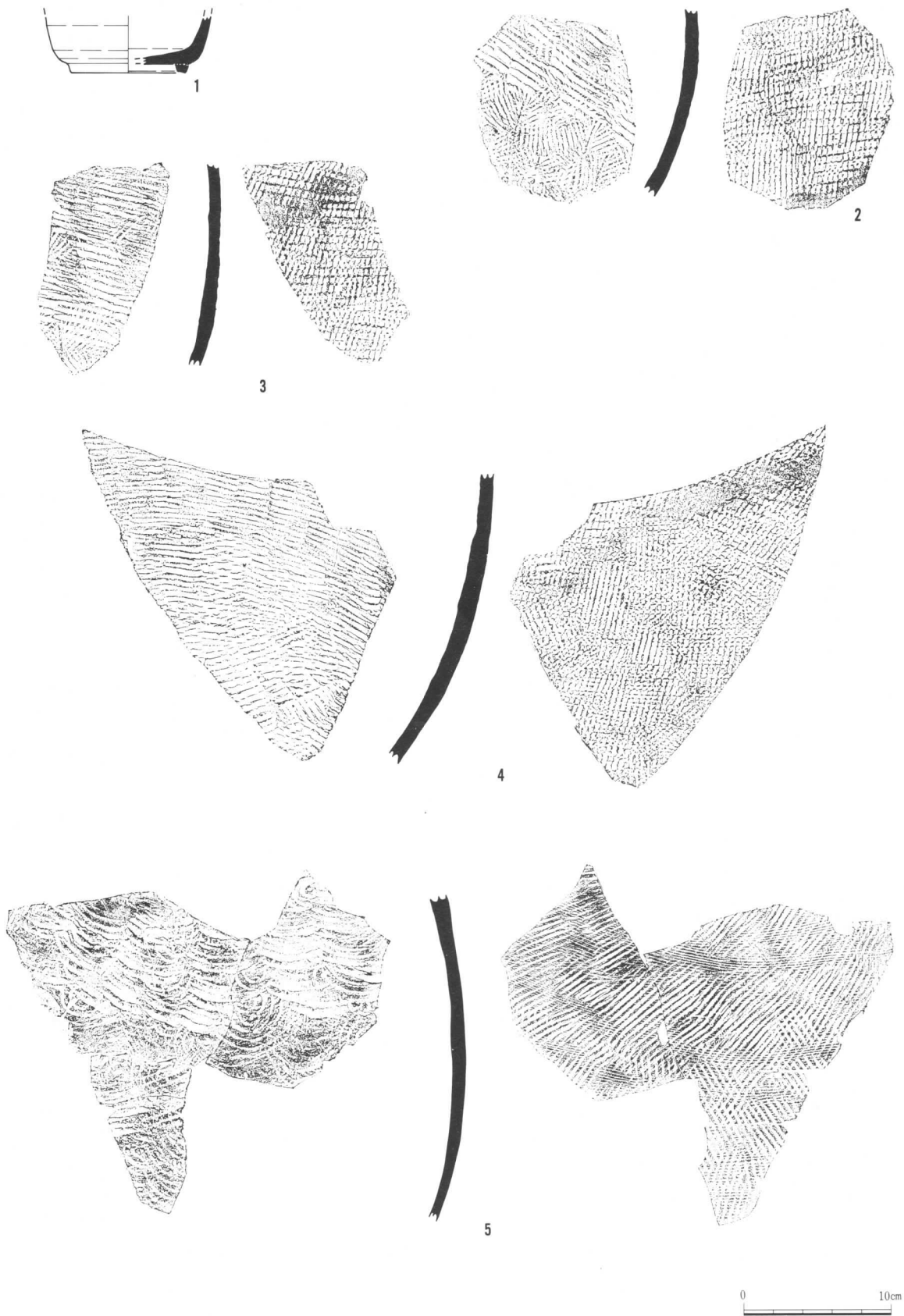
#### 石製品

軽石製勾玉(44)は頭が大きく尾は細い。穿孔は両面である。他に製品ではないが削痕が見られる(28)がある。また瑪瑙製の剝片(95)が表採されている。

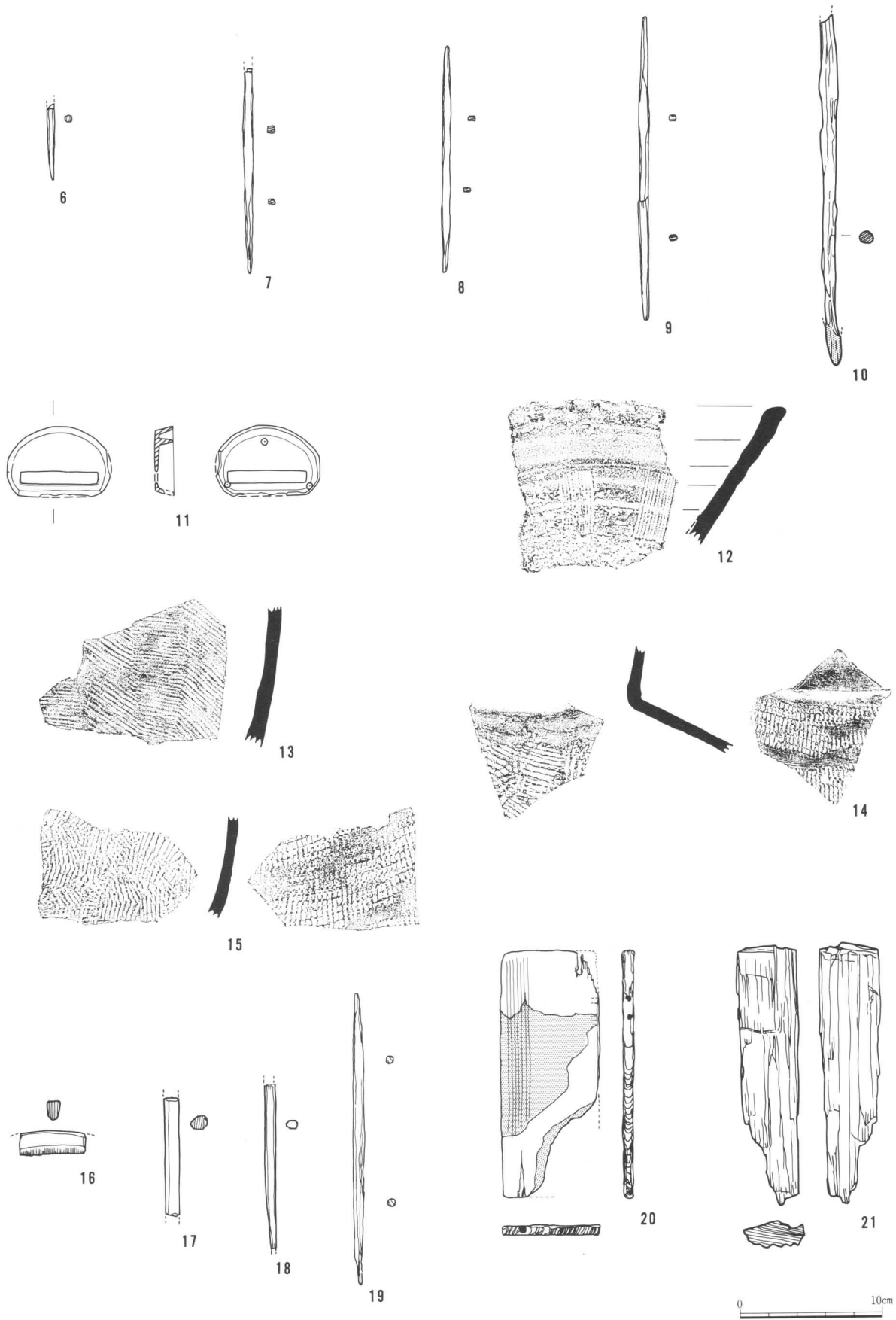
#### 木製品

箸(6～9・18・19・26)は杉材で作られた両口となるもので断面八角形を呈する。櫛(16)は基部が残るのみで歯の部分はほとんどない。木地のままであり漆はかかっていないようである。箱物部材(20)は端部に木釘を打ち込む穴が見える。火を受けており部分的に炭化している。曲げ物(14・15・28)は幅2.4cmの針葉樹板を素材とし(24)のようにケビキがみられるものもある。

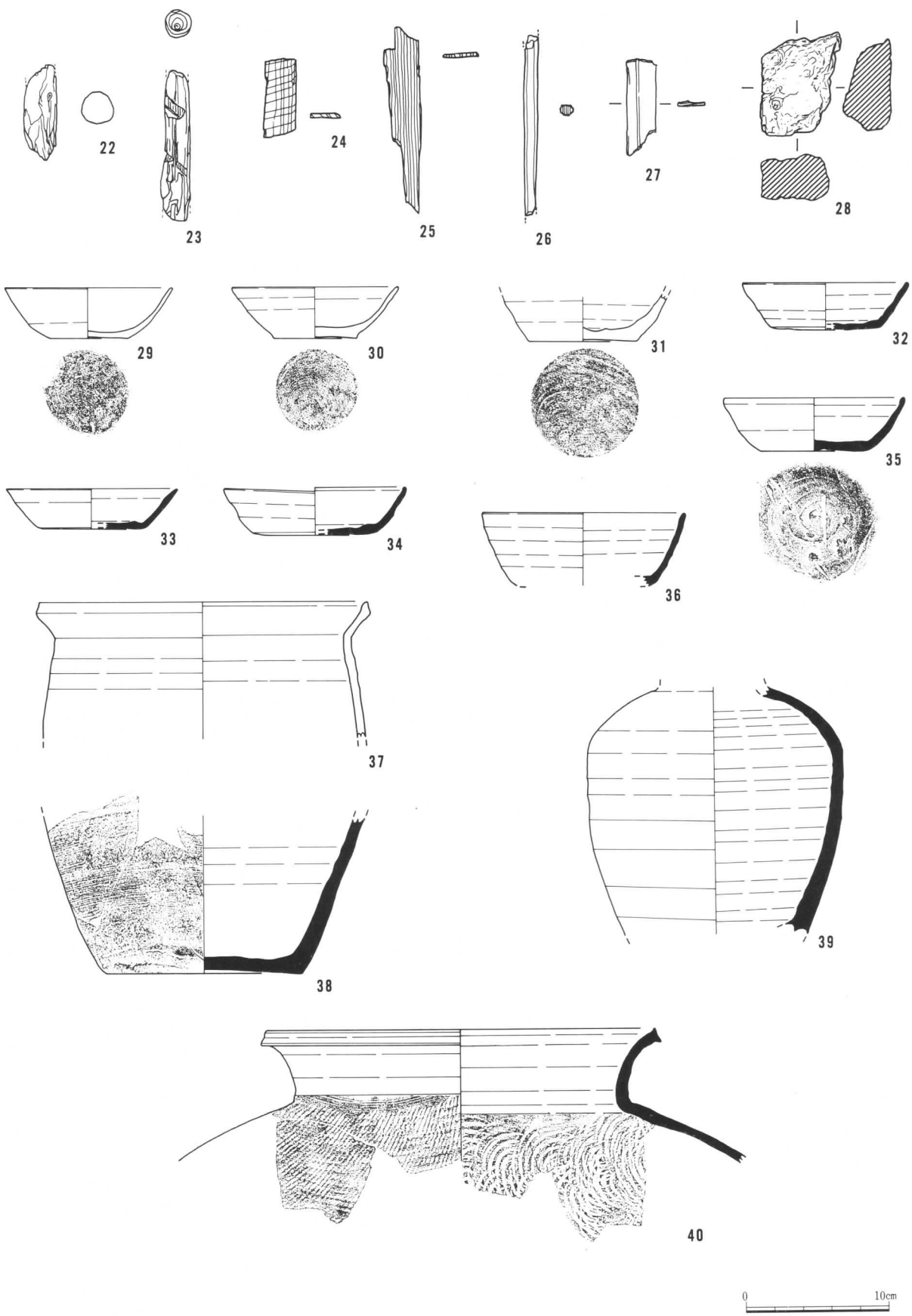




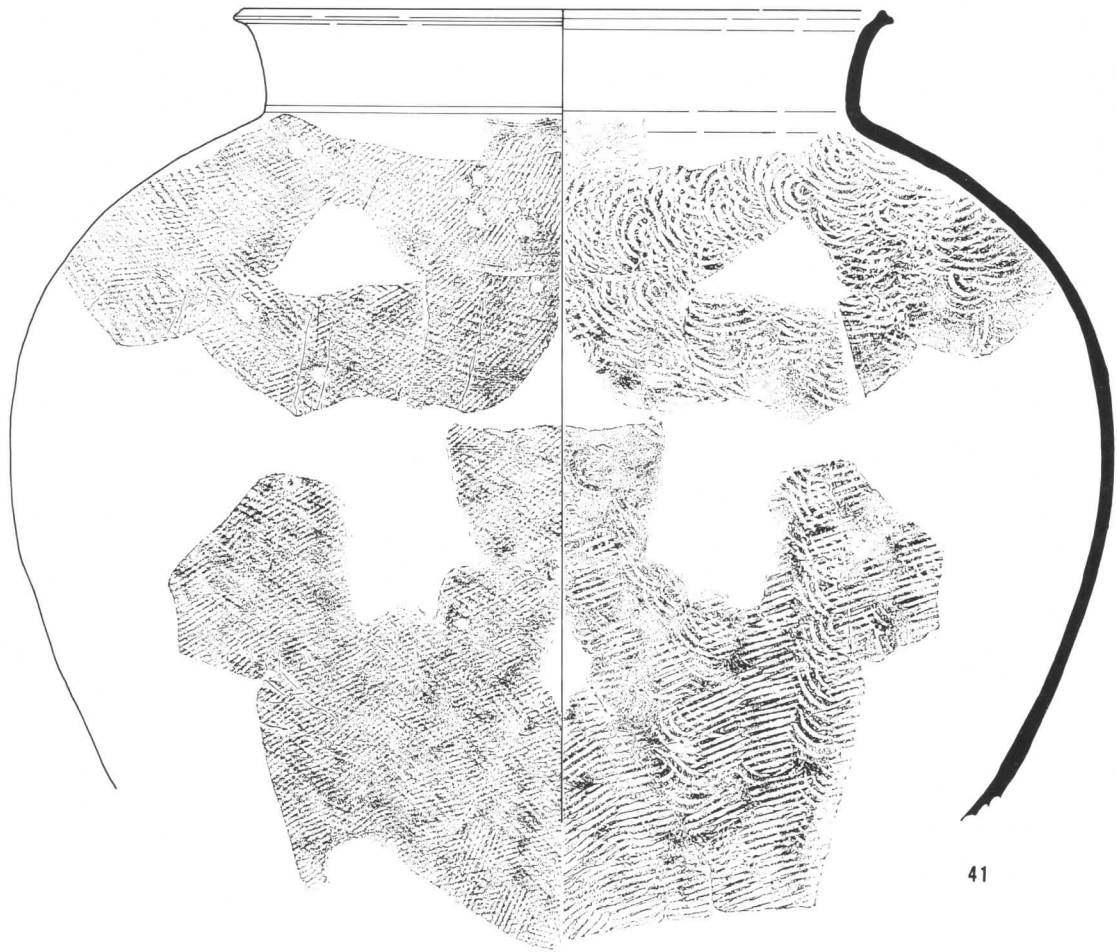
第 9 图 3 号土坑出土遗物



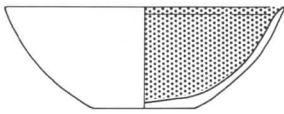
第10图 11~13号土坑出土遗物



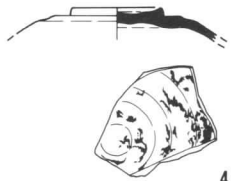
第11图 13~35号土坑出土遺物



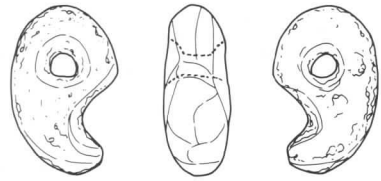
41



42



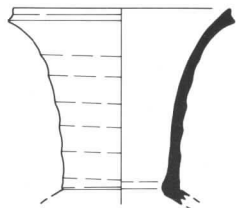
43



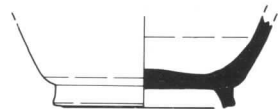
44



45



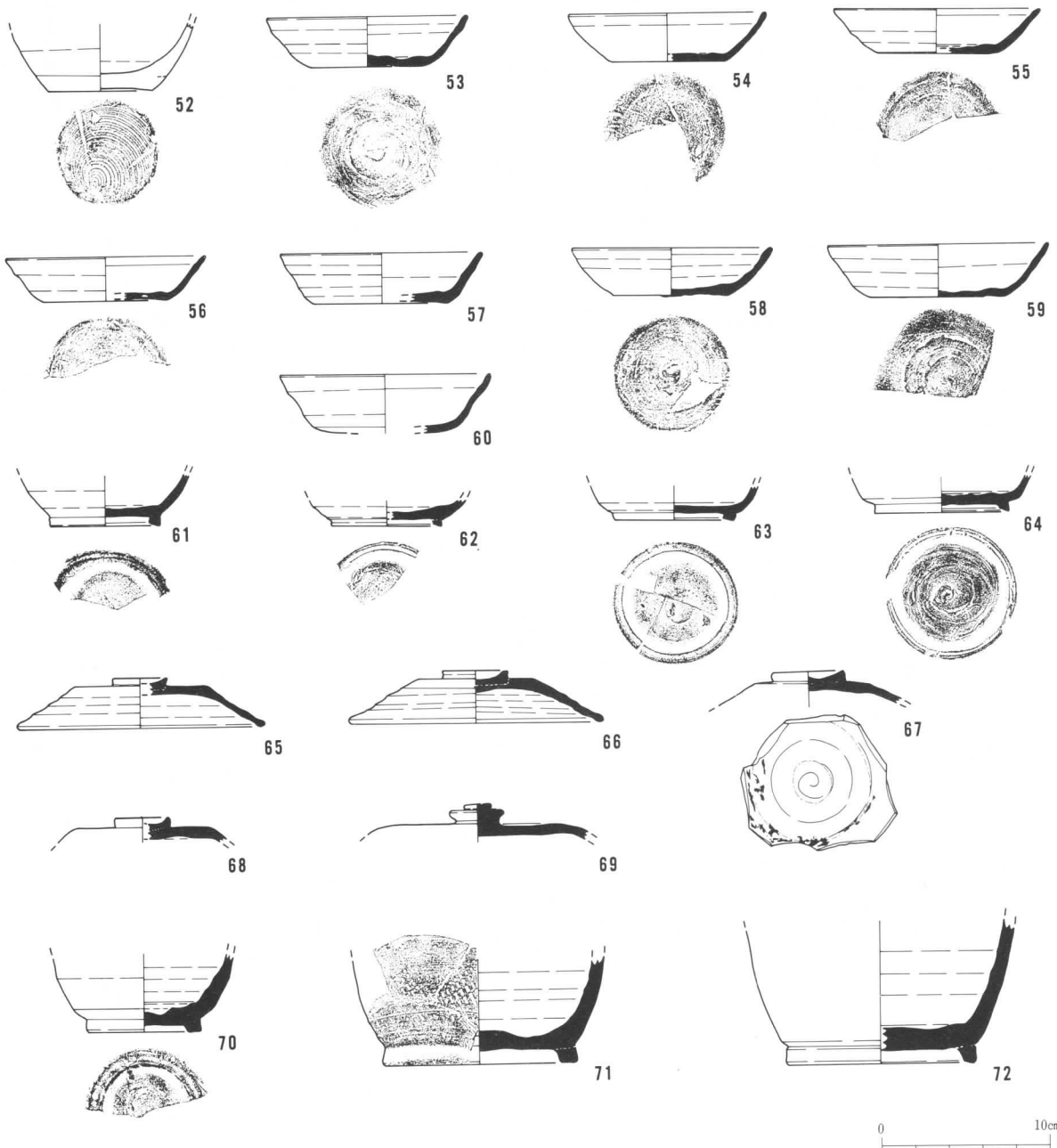
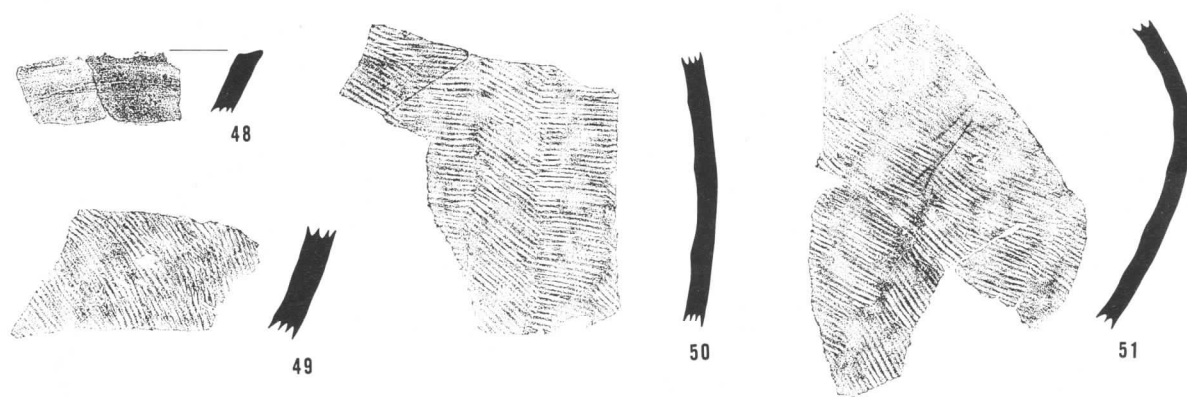
46



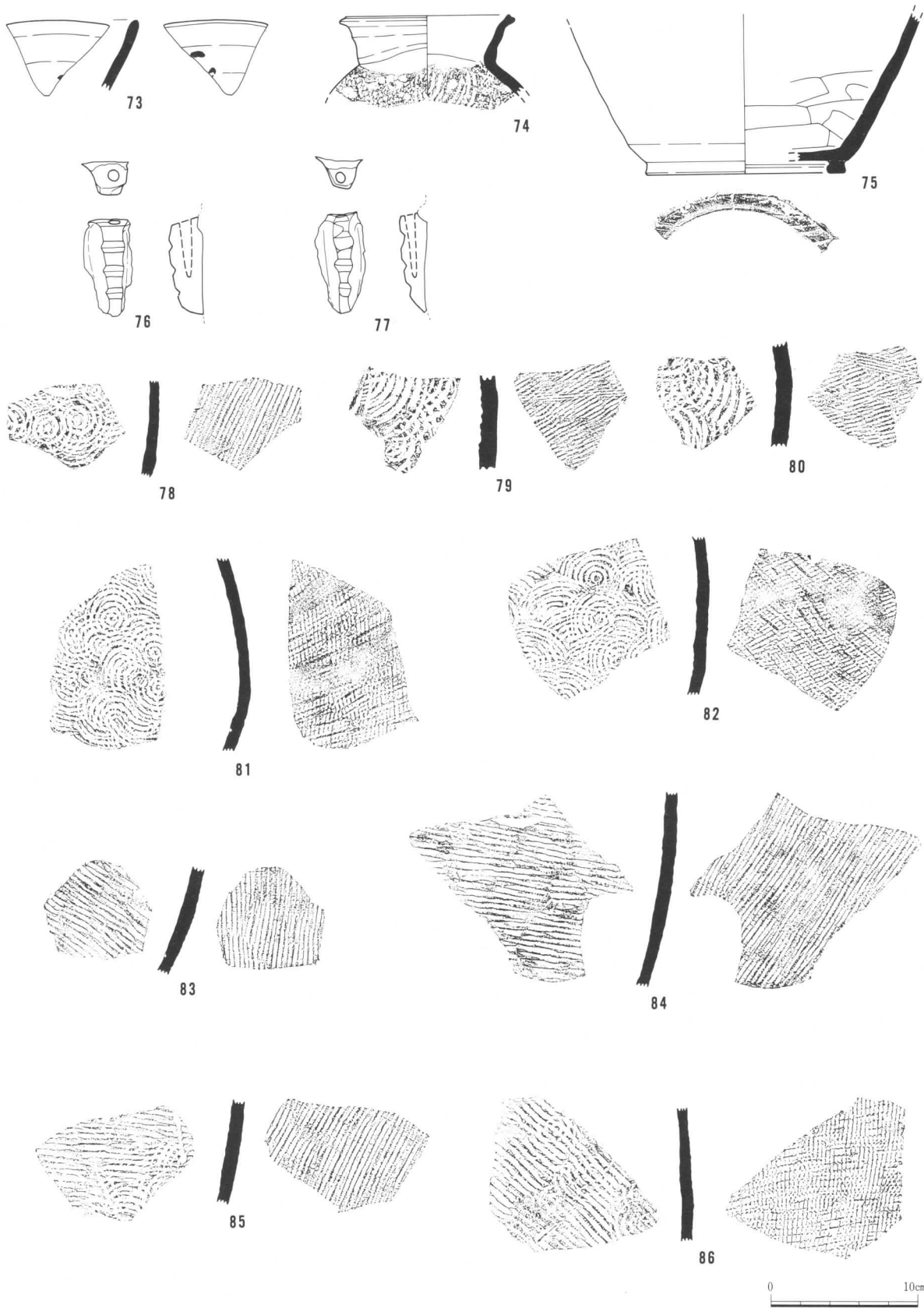
47

0 10cm

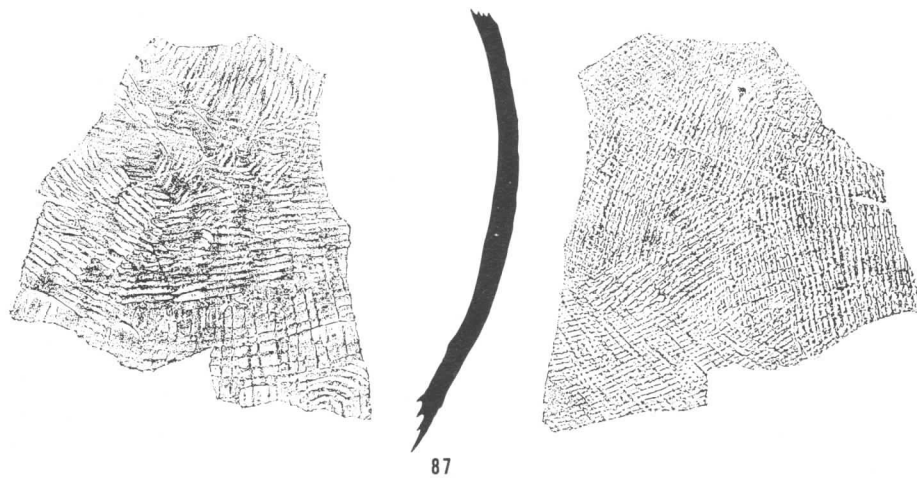
第12图 35·37号土坑、2·4·5号沟出土遗物



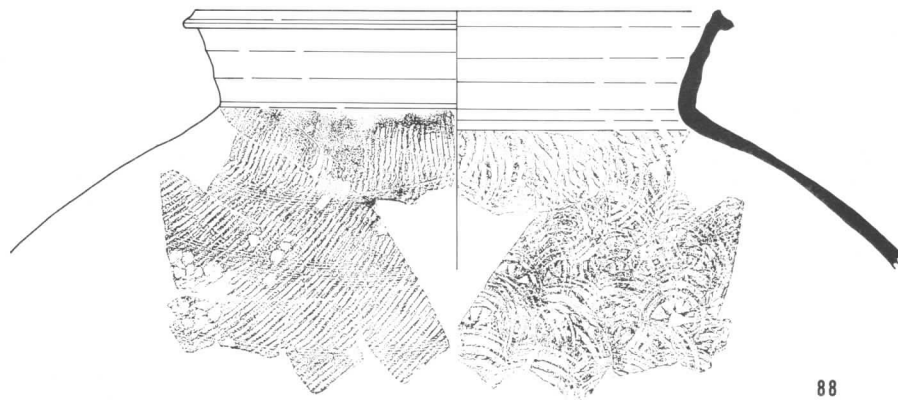
第13図 8号溝、グリッド出土遺物(1)



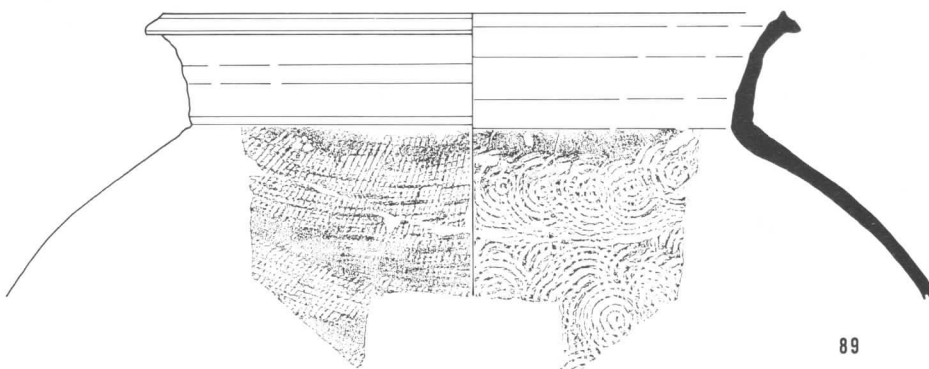
第14図 グリッド出土遺物（2）



87



88



89

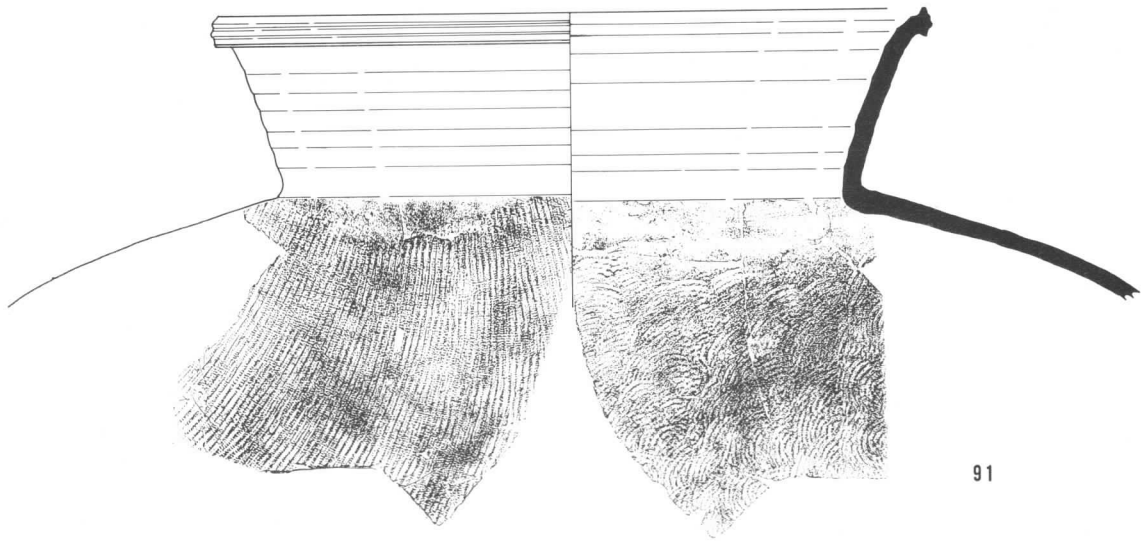


第15図 グリッド出土遺物(3)



90

0 10cm

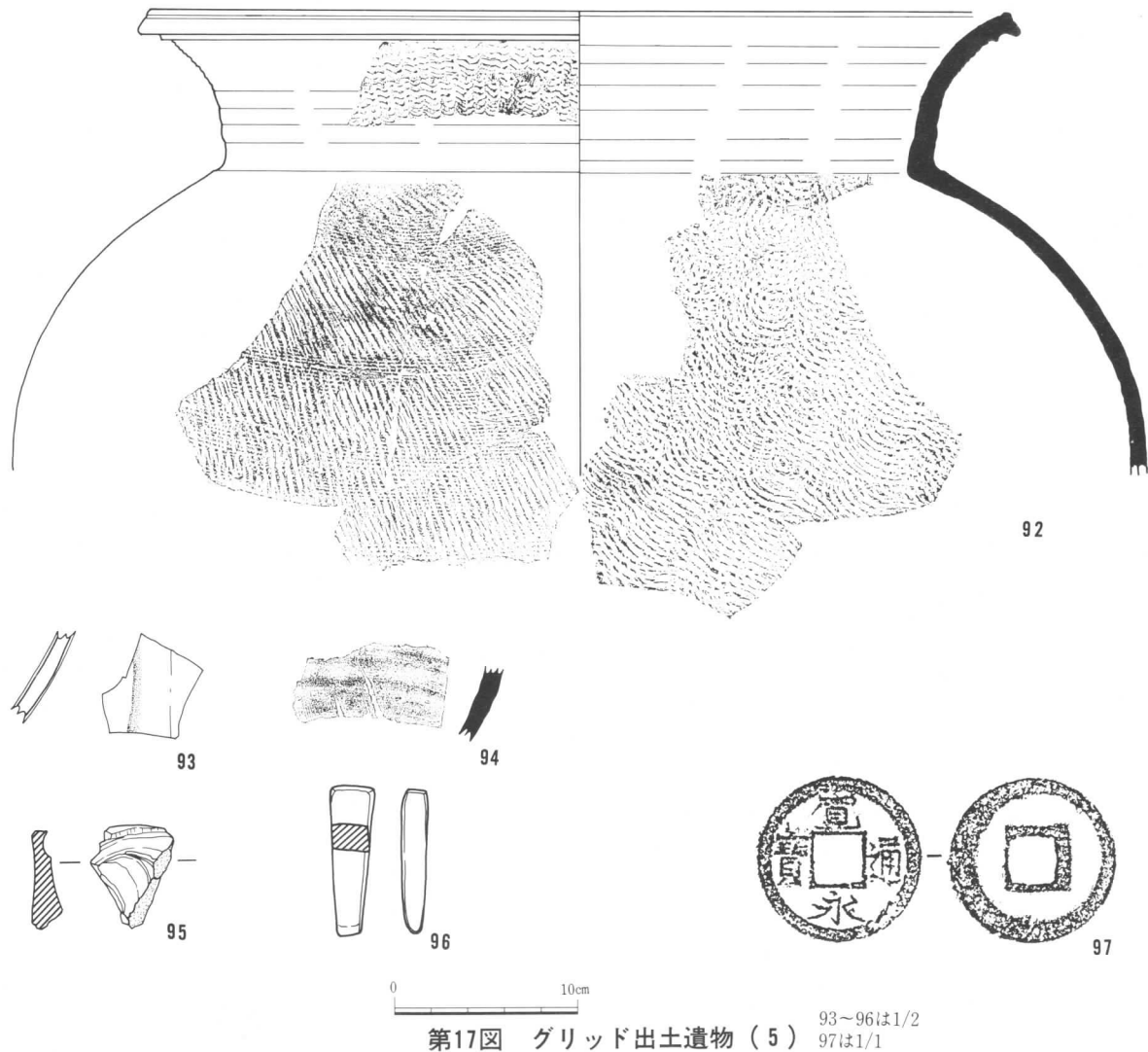


91

0 10cm

第16図 グリッド出土遺物(4)





## 第6章 まとめ

観音寺遺跡は「新潟県埋蔵文化財包蔵地カード」によると室町時代の遺跡とされている。また「小字観音寺」が物語る寺跡としての性格を考え調査に望んだが、寺院跡として直接証明できる遺構・遺物は検出されていない。ここでは遺構と遺物にわけて説明を加える。

### 1. 遺構 土坑

調査の結果、遺構は土坑26基（うち井戸の可能性あるもの3基）、溝12条、小ピット群と遺物包含層が調査区の南北両端に検出されている。遺物は3・13・35・37号土坑より平安時代の須恵器を主体に、11・12・28号土坑・4・8号溝より室町時代の珠洲焼・木器を主体としている。しかし遺物の出土状態は流れ込みによるものであるため遺構年代は明らかでない。唯一35号土坑は土師器坏・小型甕、須恵器坏・長頸瓶・甕など遺構内は遺物が充填されているため一括廃棄と考えられる。

さらに11号・12号・13号は形態、底面より水が湧き出すことから井戸の可能性が考えられ、11号・13号は箆状木製品が多く出土している。また、35・37・38号土坑は覆土下層より底面に亘り炭化米が多量に検出されている。特筆すべきは12号土坑の銅製の帯金具（丸鞆）である。珠洲焼と共に出土しているものの遺構に帰属するものではなく流れ込みによるものと思われ遺跡の性格の一端を窺い知ることができる。

## 溝

溝は水が流れた痕跡が認められ、用水路か排水路として使用されたことが推定される。また、2条平行して走行する(N-7°-E)5号溝A・Bは覆土の状況や形態の似ているところから同時期の存在が考えられる。2・3・4・10号溝についても走行はともにN-78°-Eであり、覆土(黒色粘質土)も同じ事から性格的にも関連するであろう事が窺われるが、調査区が東西に狭いため明確でない。

## 包含層(黒灰色粘土層)

調査区の南北両端には黒灰色粘土層中(10~18cm)に須恵器が包含されている。特に北側の包含層から多量に須恵器甕の破片が出土し、これらは西寄りに集中するようである。

また、遺構が地震の噴砂跡に切られている事は地震考古学の研究に良好な資料を提示することになった。

## 2. 遺物

遺物は土器が土師器坏・小型甕、須恵器坏・有台坏・蓋・長頸瓶・横瓶・三耳壺・甕、青磁鎬蓮弁文碗、珠洲焼摺鉢・壺、銅製品は丸鞆、鉄製品は楔形鉄製品、石製品は軽石製勾玉、木器は箸・櫛・箱物部材・曲げ物、また炭化米が出土している。

遺物の帰属する年代は大きく平安時代と室町時代に分けられが、ここでは平安時代の遺物を中心に述べる事とする。

この時期の遺物は土師器坏・小型甕、須恵器無台坏・有台坏・蓋・長頸瓶・横瓶・三耳壺・甕・銅製丸鞆である。土器の形態は土師器・須恵器を含めて食膳形態・煮沸形態・貯蔵形態すべてに亘って見られるが、土師器と須恵器の割合は須恵器が圧倒的である。また須恵器の煮沸形態(甌・鍋・長甕)は見られない。

須恵器は大半が胎土に白色の小粒子を含み、無台坏・有台坏は厚さ2~3mmと薄く開きが強い。底部はすべて回転ヘラ切りである。坏蓋の口縁端部は簡略化されているものが多い。甕の口縁端部は上・横に摘み出され、外面の叩き(平行・格子目)と内面の当て具(平行・同心円・放射状)など小泊窯製品の特徴とするものが多い。叩き・当て具の組み合わせは7分類される(第5章第2節の遺物)。甕の内面の当て具には胴部の上位(肩部)が同心円、それ以下は平行と使い分けされているもの(3・4類)が指摘されるが類例については子安遺跡「上新バイパス関係遺跡発掘調査報告I:子安遺跡」図版75:94が挙げられる。これらをただちに小泊窯産の特徴とするわけではないが、今後検討を加える素材にはなろう。

小泊窯産須恵器については、本間嘉晴、坂井秀也によるところが大きい。越後地方南西部における平安時代の須恵器生産について坂井秀也は「今池遺跡1984VI考察」において『9世紀後半以降のVI・VII期の須恵器がそれまでのものと異なり、上越だけでなく中越地方にも分布することから頸城地方を単位とした生産と流通体制が崩壊し、広域の生産体制が成立した。』ことを示唆している。しかしこの時点ではまだ生産地の確認にはいたっていない。具体的に生産地を指摘したのは番場遺跡である。「番場遺跡1987VIIまとめ」のなかで番場遺跡と佐渡小泊窯の製品が胎土・色調・調整において共通点が多い事を指摘し、仮りにとしながらも『9世紀後半以降国を越えて流通展開するのであれば、その歴史的意義は大きい。』としている。また「山三賀II遺跡1989VIIまとめ」のなかではさらに発展させて『律令期の生産体制を支える勢力を在地で想定するとすれば、郡司層が有力な候補である。(中略)律令体制の変質・衰退にともなって、律令期の生産体制も崩壊して行くことは、その生産を支えていたものを暗示していると思われる。』と結んでいる。

律令国家体制では、生産と供給はほぼ郡単位で行なわれている。こうしたなかで小泊窯の製品が多量に他郡に供給される9世紀後半は全国的にも体制が崩れ始め模索する時期でもあり、まさに小泊窯の製品は越後

での律令国家体制崩壊を指摘する考古学的資料と思われる。

このような時代を背景とする観音寺遺跡は、今回の調査において性格を明確にできる遺構は検出されなかったものの、特徴的な遺物として小泊窯の製品（9世紀後半代）に加えて35～37号土坑の底部より炭化米・転用硯(43)が出土している。転用硯はほかに包含層中(67)と計2点となる。墨書土器は「判読不明」であるが(73)がみられ、さらに13号土坑より銅製の帯金具(11)が出土しているところから識字層にかかわる遺跡として注目されよう。あるいはさらに発展して考えるなら、米などを集積する公的な地域が近接して展開する事も予想される。

しかし、観音寺遺跡の調査は始まったばかりであり、今後の調査による資料の蓄積を待って検討を加える事が必要であり、ここでは言及しない。

#### 《引用・参考文献》

北陸古代手工業生産史研究会：「北陸の古代手工業生産」1989

宇野隆夫：「律令社会の考古学的研究」桂書房

坂井秀也：「今池・下新遺跡・子安：上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ」新潟県教育委員会 1984

坂井秀也：「番場遺跡：新潟県埋蔵文化財調査報告第48集」新潟県教育委員会 1987

坂井秀也：「山三賀Ⅱ遺跡：新新バイパス関係遺跡発掘調査報告」新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所1989

坂井秀也：「山三賀Ⅱ遺跡からみた阿賀北地方の古代土器」新潟考古学談話会会報 第4号 1989

坂井秀也・鶴間正昭・春日真美：「佐渡の須恵器」新潟考古 第2号 1991

坂井秀也：「青森県空沢遺跡の『小泊産須恵器』について」新潟考古学談話会会報 第9号 1992 このなかで小泊産須恵器の胎土の特徴について『…精良であるが、ねばりはなく、白色の小粒子を多く含む。ただし、石英などの硬質の粒子はいっさい含まない。甕類ではとくに細かい粒子を含み、ざっくりした質感をもち、破断面がザラザラしている。』の説明がある。

本間嘉晴：「小泊窯趾群」『新潟県史』通史偏1 原始・古代新潟県

中之島村史編集委員会：「中之島村史 上巻」昭和63年

戸根与八郎・木村康裕・西村 康：「羽茂町内遺跡確認調査報告書—小泊窯趾群ほか—」新潟県羽茂町教育委員会 1994

第3表 3号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
1	須恵器 有台坏	口径 底径 器高 (7.8)	体部～底部片。体部は有台部より丸身を帯びて直線的に開く。有台部は断面台形状を呈し貼り付けによる。	白色細砂粒・小礫	還元堅緻	灰色	
2	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。内面の当て具は平行と放射状の2種が認められるが放射状のなかには矢羽状あるいは木葉状のものが認められる。外面の叩きは格子である。	白色粗砂粒	還元堅緻	灰色	3と同固体か
3	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。内面の当て具は平行と放射状の2種が認められるが放射状のなかには矢羽状あるいは木葉状のものが認められる。外面の叩きは格子である。	白色粗砂粒 少量	還元堅緻	灰色	2と同固体か
4	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。内面の当て具は平行。外面の叩きは格子である。	白色粗砂粒 少量	還元堅緻	灰色	
5	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。内面の当て具は同心円。外面の叩きは平行で後で横位にカキメを施す。	白色粗砂粒 少量	還元堅緻	灰色	

第4表 11号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
6	木製品 箸	長さ(5.4) 幅 0.5	残存1/3。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらに面取りし断面六角形を呈する。				
7	木製品 箸	長さ(14.4) 幅 0.8	残存2/3。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらに面取りし断面六角形を呈する。				
8	木製品 箸	長さ15.8 幅 0.6	残存2/3。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらに面取りし断面六角形を呈する。				
9	木製品 箸	長さ21.2 幅 0.7	完形品。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらに面取りし断面六角形を呈する。				
10	木製品 不明	長さ24.5 幅 1.3	径1.3cmの細い木製品で先端を尖らせ木杭状にする。木製品の大半は腐食しわずかに先端が炭化したため形状をとどめている。火鑽棒であろうか。				

第5表 12号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
11	銅製品 丸鞘	長さ3.7 幅2.5 器厚0.7	一部欠損。形態は蒲鉾形を呈し透かしは長さ2.8cm、幅4.5cmを測る。3カ所にリベット状の釘がある。				
12	珠洲焼き 播鉢	口径 底径 器高	口縁部片。口縁部は端部で丸くおさめるB類(1987坂井)。条線は太く10本の単位で間隔を置いて施される。内面は器面の剥離が顕著である。	細砂粒多・白色細礫少	還元堅緻	灰色	胎土中には海面状骨針が多量に含まれる。
13	珠洲焼き 壺	口径 底径 器高	胴部片。叩き成形のT型壺(吉岡編年)である。外面の叩きは平行で細かい綾杉条を呈す。	細砂粒	還元堅緻	灰色	
14	須恵器 甕	口径 底径 器高	頸～肩部片。口縁～頸部は直立し余り開かない。内面の当て具は平行、外面の叩きは格子でカキメ状の条線が見られる。	細砂粒	還元堅緻	灰色	

第6表 13号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
15	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。内面の当て具は平行。外面の叩きは格子である。	白色粗砂粒 少量	還元堅緻	灰色	
16	木製品 櫛	長さ(4.7) 幅(1.6) 厚さ0.8	櫛の部分で材質は明確でない。櫛目は細かく木地のままであり塗りは見られない。				
17	木製品 不明	長さ(8.3) 幅 1.0	材質は木目が細かく栓であろうか。棒状に成形し断面は面取りして多面形を呈する。				
18	木製品 箸	長さ(11.4) 幅 0.7	残存1/2。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらにめんとりし断面六角形を呈する。				
19	木製品 箸	長さ(20.4) 幅 0.7	残存1/1。材質は杉である。成形は両端を尖らせ断面四角形とし整形段階で四隅をさらに面取りし断面六角形を呈する。				
20	木製品 箱物部材	長さ17.3 幅7.8 厚さ0.7	柁目板を使用した箱物の部材と思われる。右側面上部に2孔、下面左端に1孔木釘穴が穿たれ、上・左側面には見られない。				
21	木製品 不明	長さ17.3 幅7.8 厚さ0.7	杭状のものを縦割りにして上面を削り面を形成する。一部に削り痕が見える。				

第6表 13号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
22	木製品 杭	長さ(6.6) 幅 2.3	小規模の杭で整形痕は見られない。火を受け表面は炭化している。				
23	木製品 杭	長さ(10.5) 幅 1.7	小規模の杭で整形痕は見られないが複数の削痕が見える。				
24	木製品 曲げ物	長さ(5.4) 幅 2.3	杉材の曲げ物の一部で斜方向のケビキが見られる。				
25	木製品 曲げ物	長さ(13.0) 幅 2.4	杉材の曲げ物の一部である。				
26	木製品 箸	長さ(12.5) 幅 1.0	残存1/3。材質は杉で両先端は欠損する。中央の断面は六角形を呈する。				

第7表 28号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
27	石製品	長さ 2.3 幅 2.0 厚さ 0.7	製品ではないが部分的に面をなし、一部には削り痕が見える。40g				
28	木製品 箸	幅 2.0 厚さ 0.2	杉材の曲げ物である。ケビキなどの痕跡は見られない。				

第8表 35号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形、成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
29	土師器 坏	口径(11.6) 底径 5.3 器高 3.5	口縁～体部は内湾しながら開く。右回転、底部回転糸切り無調整。	細・粗砂粒多	酸化堅緻	橙 色	
30	土師器 坏	口径(11.6) 底径 5.8 器高 3.6	口縁～体部は内湾しながら開く。右回転、底部回転糸切り無調整。	細・粗砂粒多・褐色粒	酸化堅緻	橙 色	
31	土師器 小型甕	口径 底径 7.5 器高(3.1)	底部片。ロクロ成形の甕である。底部回転糸切り無調整。	細・粗砂多・褐色粒	酸化堅緻	橙 色	
32	須恵器 坏	口径 11.5 底径 器高(3.3)	口縁～体部残存1/3。口縁～体部は直線的に開く。底部回転ヘラ切り。	僅かな白色細砂粒	還元堅緻	灰 色	
33	須恵器 坏	口径 11.9 底径 7.2 器高 2.9	口縁～体部残存1/3。口縁～体部は直線的に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細砂粒	還元堅緻	灰 色	
34	須恵器 坏	口径 12.6 底径 8.7 器高 3.3	口縁～体部残存1/3。口縁～体部は直線的に開き口縁端部は内稜を有す。底部左回転ヘラ切り。	白色細砂・黒色粒	還元軟質	灰 色	
35	須恵器 坏	口径 12.6 底径 7.4 器高 3.7	残存3/4。口縁～体部は内湾しながら開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細砂粒	還元堅緻	灰 色	僅かに海綿状骨針が見える。
36	須恵器 坏	口径 14.0 底径 器高(5.1)	口縁～体部残存1/2・底部欠損。口縁～体部は内湾しながら開く容量の深いもの。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰 色	
37	土師器 小型甕	口径 23.0 底径 器高(9.5)	口縁～胴部片。口縁部は端部で上方につまみ上げられる。ロクロ成形。	長石・石英粒・粗砂粒	酸化堅緻	鈍い黄橙色	
38	須恵器 甕	口径 底径 13.7 器高(11.0)	胴～底部。輪積み→ロクロ成形。胴部下位は横方向のカキ目調整を施す。内底部には自然軸が附着する。	白色細砂粒	還元堅緻	灰 色	
39	須恵器 長頸瓶	口径 底径 器高(17.3)	肩～胴部片。ロクロ成形。肩部は丸く成形し胴部外面下位は回転ヘラ切り。	白色細粒・粗砂粒・小礫	還元堅緻	灰 色	
40	須恵器 甕	口径 28.0 底径 器高	口縁～肩部片残存1/5。口縁～頸部は短く外反し口縁端部をつまみ上げる。内面の当て具は同心円、外面の叩きは平行である。	石英・長石粒	還元堅緻	灰 色	
41	須恵器 甕	口径 35.0 底径 器高(43.0)	口縁～頸部は短く外反し口縁端部をつまみ上げる。内面の当て具は上～中位が同心円・中～下位が平行と分けて施される。外面の叩きは平行である。	石英・長石粒	還元堅緻	灰 色	

第9表 37号土坑出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
42	土師器 坏	口径 14.7 底径 5.3 器高 5.3	口縁~底部残存1/3。口縁~体部は内湾しながら開く容量の深いものである。成形は外面が軟弱であるため不明。内面の中世は黒色処理→ヘラ磨きである。	細砂粒・褐色粒	酸化軟質	淡黄色	
43	須恵器 蓋 転用甕	口径 底径 器高	天井部片。つまみは僅かにリング状のものである。天井部内面には墨痕・擦痕が顕著であり硯に転用されたものと思われる。	僅かな白色 細砂粒	還元堅緻	灰色	

第10表 2号溝出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
44	石製勾 玉	長さ 4.4 幅 2.8 厚さ 1.7	石材は軽石である。勾玉状に粗く調整し両面から穿孔を加える。				

第11表 4号溝跡出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
45	珠洲焼 き 播鉢	口径 底径 器高	口縁部片。口縁端部は水平な面を形成し外につまみ出されるC類(1987坂井)である。	白色細粒・海綿状	還元堅緻	灰色	

第12表 5号溝出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	方量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
46	須恵器 長頸瓶	口径 11.2 底径 器高(10.4)	口縁~頸部。口縁端部は上と外につまみ出される。内外面被熱によると思われる剥離が顕著である。	白色細粒	還元堅緻	灰色	
47	須恵器 長頸瓶	口径 底径 9.5 器高(4.9)	底部。有台は断面台形状を呈する。内底部に自然釉が付着する。	白色細粒	還元堅緻	灰色	

第13表 8号溝出土遺物観察表

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
48	珠洲焼 き 播鉢	口径 底径 器高	口縁部片。口縁端部は水平な面を形成し外につまみ出されるC類(1987坂井)である。内面に僅かに条線痕がみえる。	白色細砂	還元堅緻	灰色	
49	珠洲焼 き 壺	口径 底径 器高	胴部片。叩き成形のT型壺(吉岡編年)である。外面の叩きは平行で細かい綾杉条を呈す。	白色細砂粒・海綿状骨針	還元堅緻	灰色	
50	珠洲焼 き 壺	口径 底径 器高	胴部片。叩き成形のT型壺(吉岡編年)である。外面の叩きは平行で細かい綾杉条を呈す。	白色細砂粒・海綿状骨針	還元堅緻	灰色	
51	珠洲焼 き 壺	口径 底径 器高	胴部片。叩き成形のT型壺(吉岡編年)である。外面の叩きは平行で細かい綾杉条を呈す。	白色細砂粒・海綿状骨針	還元堅緻	灰色	

第14表 グリッド出土遺物観察表(1)

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
52	土師器 小型甕	口径 底径 6.0 器高(4.0)	底部。底部右回転糸切り無調整→胴部下端回転ヘラ削り。	細粗砂粒多・海綿状骨針	酸化堅緻	灰褐色	C3グリッド
53	須恵器 坏	口径 12.0 底径 6.8 器高 3.0	3/4残存。口縁~体部は屈折気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	僅かな白色 細砂粒	還元堅緻	灰色	D9グリッド
54	須恵器 坏	口径 11.6 底径 7.0 器高 2.9	1/3残存。口縁~体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	A1グリッド
55	須恵器 坏	口径 12.1 底径 7.0 器高 2.7	1/4残存。口縁~体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細・粗砂粒小礫少	還元堅緻	灰色	B2グリッド
56	須恵器 坏	口径 11.8 底径 7.4 器高 2.6	1/4残存。口縁~体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B2グリッド
57	須恵器 坏	口径 12.0 底径 8.0 器高 3.0	1/5残存。口縁~体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細・粗砂粒小	還元堅緻	灰色	A3グリッド
58	須恵器 坏	口径 11.8 底径 6.9 器高 2.8	1/2残存。口縁~体部は内湾気味に開く。底部左回転ナデ。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	C2グリッド

第15表 グリッド出土遺物観察表(2)

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
59	須恵器 坏	口径 13.0 底径 8.0 器高 3.1	1/4 残存。口縁～体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細粗砂粒・小礫	還元堅緻	灰色	C 3グリッド
60	須恵器 坏	口径 12.6 底径 8.6 器高 3.5	1/4 残存。口縁～体部は内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り後回転ナデ。	白色細粗砂粒	還元軟質	灰色	B 2グリッド
61	須恵器 有台坏	口径 6.6 底径 6.6 器高 (3.3)	口縁部欠損・体～底部片。体部は有台部より内湾気味に開く。有台部貼り付け。	白色細砂粒少	還元堅緻	灰色	B 3グリッド
62	須恵器 有台坏	口径 6.6 底径 6.6 器高 (1.6)	体～底部片。体部は有台部より内湾気味に開く。有台部は貼り付けによるもので幅狭く断面「M字」状となる貼り付け。	白色細砂粒少・黒色粒	還元堅緻	灰色	D 3グリッド
63	須恵器 有台坏	口径 7.1 底径 7.1 器高 (2.0)	体～底部片。体部は有台部より内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り。有台部は貼り付けによるもので幅広く断面「M字」状となる。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
64	須恵器 有台坏	口径 8.0 底径 8.0 器高 (2.0)	体～底部片。体部は有台部より内湾気味に開く。底部左回転ヘラ切り。有台部は貼り付けによるもので幅狭く断面「M字」状となる貼り付け。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	A 1グリッド
65	須恵器 蓋	口径 14.4 底径 3.0 器高 3.0	1/5 残存。天井～口縁部は外稜を有して開き、口縁部は折り返され丸みを帯びる。天井部回転ヘラ削り。鈕は小さなリング状で天井部窪みに貼り付ける。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
66	須恵器 蓋	口径 14.8 底径 3.1 器高 3.1	天井部片。天井～口縁部は外稜を有して開き回転ヘラ削り。鈕はリング状で天井部窪みに貼り付ける。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	灰色	A 1グリッド
67	須恵器 蓋	口径 14.8 底径 3.1 器高 3.1	天井部片。天井～口縁部は外稜を有して開き回転ヘラ削り。鈕はリング状で天井部窪みに貼り付ける。	白色細砂粒・黒色粒	還元堅緻	黄灰色	A 3グリッド
68	須恵器	口径 14.8 底径 3.1 器高 3.1	天井部片。天井～口縁部は外稜を有して開き回転ヘラ削り。鈕はリング状で天井部窪みに貼り付ける。内面天井部墨痕・擦痕が顕著であり転用硯と思われる。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
69	須恵器 蓋	口径 14.8 底径 3.1 器高 3.1	口縁部欠損。天井～口縁部は外稜を有して開くタイプ。回転ヘラ削り。鈕は扁平でさらに小さな扁平鈕を貼り付け多段となる。壺蓋か。	白色細・粗砂粒	還元軟質	灰色	B 2グリッド
70	須恵器 瓶	口径 7.2 底径 7.2 器高 (4.6)	底部片。胴～底部は内湾気味に開く小型の瓶である。有台は断面台形状を呈し貼り付けられる。胴部下端回転ヘラ削り。	白色細砂粒・黒色	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
71	須恵器 瓶	口径 11.6 底径 11.6 器高 (7.3)	底部片。胴～底部は内湾気味に開く。有台は断面台形状を呈し貼り付けられる。胴部に格子目の叩きを施す。	白色細・粗砂粒小礫少	還元堅緻	灰色	A 1・B 2・B 3グリッド
72	須恵器 瓶	口径 13.6 底径 13.6 器高 (10.8)	底部片。胴～底部は内湾気味に開くが張りはない。有台は断面台形状を呈し貼り付けられる。調整は器面が溶解しているため不明。	白色細・粗砂粒	還元軟質	灰色	A 1・B 2グリッド
73	須恵器 坏	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	口縁部片。体部内外に墨痕あり。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	B 9グリッド
74	須恵器 横瓶	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	口縁部片。口縁部の開きはなく端部で上・横に摘み出される。胴部は外面が格子目叩き、内面の当て具は同心円である。自然釉の垂れより横位での窯入である。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
75	須恵器 瓶	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	底部片。胴～底部は内湾気味に開くが張りはない。有台部は貼り付けによるもので断面台形状となり内面を「U字」状の工具でナデられる。胴部内面指ナデ。	白色細・粗砂粒小	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
76	須恵器 三耳壺	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	外耳。中央に刺突孔をもつ三角形の耳である。外面に3本のキザミ目を施す。三耳壺の突帯部に貼り付けられていたもので耳の上部に突帯部痕が見える。	白色細砂・黒色粒	還元堅緻	灰色	A 1グリッド
77	須恵器 三耳壺	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	外耳。中央に刺突孔をもつ三角形の耳である。外面に3本のキザミ目を施す。三耳壺の突帯部に貼り付けられていたもので耳の上部に突帯部痕が見える。	白色細砂	還元堅緻	灰色	A 1グリッド
78	須恵器 甕	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	胴部片。外面の叩きは平行、内面の当て具は同心円である。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	A 1グリッド
79	須恵器 甕	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	胴部片。外面の叩きは平行→カキ目、内面の当て具は同心円である。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド
80	須恵器 甕	口径 11.0 底径 11.0 器高 (8.5)	胴部片。外面の叩きは平行→カキ目、内面の当て具は同心円である。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	B 2グリッド



第16表 グリッド出土遺物観察表(3)

(単位: cm)

番号	器種	法量	器形・成・整形の特徴	胎土	焼成	色調	出土位置・備考
81	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは格子目、内面の当て具は同心円である。	白色細・粗砂粒小	還元堅緻	灰色	B2グリッド
82	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは格子目、内面の当て具は同心円である。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	B2・3グリッド
83	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは平行、内面の当て具は平行である。	白色細砂粒小	還元堅緻	灰色	B2グリッド
84	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは平行、内面の当て具は平行→同心円である。	白色細砂粒	還元堅緻	灰色	3グリッド
85	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは平行、内面の当て具は平行→同心円である。	白色細・粗砂粒小	還元堅緻	灰色	B2グリッド
86	須恵器 甕	口径 底径 器高	胴部片。外面の叩きは格子目、内面の当て具は平行→同心円である。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	B2グリッド
87	須恵器 甕	口径 底径 器高	底部片。外面の叩きは格子目、内面の当て具は格子目平行・同心円である。	白色細・粗砂粒	還元堅緻	灰色	A1・B2グリッド
88	須恵器 甕	口径 底径 器高 29.4	口縁～胴部。口縁部は短く開き端部で上・横方向に積み上げられる。外面の叩きは平行→カキ目、面の当て具は同心円である。	石英・長石粒多	還元堅緻	灰色	
89	須恵器 甕	口径 底径 器高 34.8	口縁～胴部。口縁部は短く開き端部で上・横方向に積み上げられる。外面の叩きは格子目、内面の当て具は同心円である。	石英・長石粒多	還元堅緻	灰色	
90	須恵器 甕	口径 底径 器高 31.2	口縁～胴部。口縁部は短く開き端部で上・横方向に積み上げられる。外面の叩きは格子目、内面の当て具は同心円である。	石英・長石粒	還元堅緻	灰色	
91	須恵器 甕	口径 底径 器高 37.8	口縁～胴部。口縁部は短く開き端部で上・横方向に積み上げられる。外面の叩きは平行、内面の当て具は同心円である。	石英・長石粒多	還元堅緻	灰色	
92	須恵器 甕	口径 底径 器高	口縁～胴部。口縁部は短く開き端部で上・横方向に積み上げられる。外面の叩きは平行、内面の当て具は平行→同心円である。胴部の接点は不明瞭。	石英・長石粒多	還元堅緻	灰色	
93	輸入陶器 磁青磁 鎗蓮弁文碗	口径 底径 器高	体部片。体部外面に片切彫による鎗蓮弁が施されている。	灰色の磁胎	還元堅緻	釉調は緑枯色	A2グリッド
94	珠洲焼き 摺鉢	口径 底径 器高	体部片。ロクロ成形によるもので内体部には摺目が僅かに残るが単位は不明である。	海面状骨針多	還元堅緻	暗灰色	B2グリッド
95	銭貨	口径 厚さ 2.3 0.1	「寛永通寶」行書である。方形の穴は0.6×0.6cm。「永」と「寶」を特徴とし「永」の字は押さえが中心より左に位置し、「寶」の王の字は右下がりとなる。				表採
96	鉄製品	長さ 幅 厚さ 8.5 2.3 1.4	形態は長めの台形状、断面方形を呈する。側面より見ると幅狭くなる箇所は鋭角となり楔型となる。90g				表採
97	瑪瑙	長さ 厚さ 2.3 2g	自然面を残す剥片で2方向より打撃が加えられている。	剥片			D3グリッド



## 第7章 自然科学分析

### 第1節 観音寺遺跡出土の炭化米について

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### 1. 試料

試料は、平安時代とされる35、36、37号土坑から検出された種実遺体3袋（それぞれ100～100粒の種実が入っていた）である。

#### 2. 方法

試料を風乾後、双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種類を同定した。

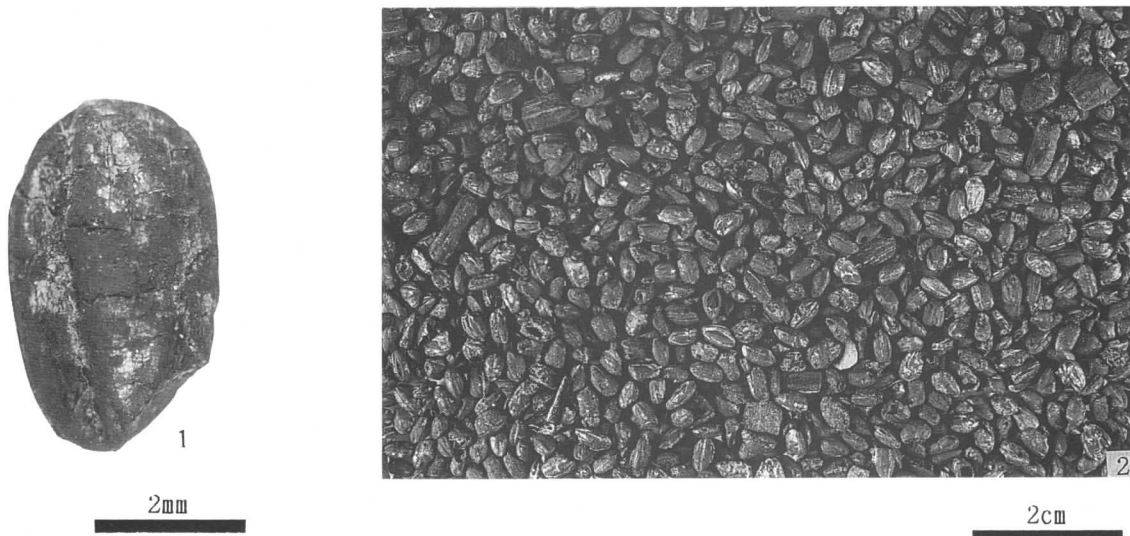
#### 3. 所見

今回同定を行った試料中から検出された種実遺体は、全てイネ (*Oryza sativa* L.) の炭化した胚乳である。各土坑から検出されたものはすべて単体で、一部に穎（籾）が付着したものも存在する。大きさは、長さが4～5mm、幅が3mm前後である。これら炭化米の大きさは、佐藤（1988）による分類にしたがえば短粒形で極小～小に分類されるものが多い。この形状を持つものは佐藤（1988）の調査結果のなかでも、最も多く認められる形状であることから、平均的な形状を持っているといえる。

なお、これらの炭化米が出土した土坑の性格・用途について詳細なことはわからないが、まとめて火熱を被ったとみられる。

#### 文献

佐藤敏也（1988） 弥生のイネ、「弥生文化の研究2 生業」、  
金関 恕・佐原 真編、p97-111、雄山閣。



図版1 種実遺体 1・2、イネ（35号土坑）

## 第2節 観音寺遺跡で検出された液状化跡

寒川 旭

### 1. 地震考古学とは

考古学の遺跡発掘調査の過程で、人間の生活にかかわる様々なものが顔を出す。そして、過去の地震の痕跡が発見されると、考古学の遺構や遺物との前後関係から、地震の年代を知ることができる。日本の場合、地震史料が年代順に集められているから、これと対比する事によって、地震跡形成の年月日と時刻を知ることとも可能である。

また、他の遺構と同じように、地震の痕跡を立体的に掘削して詳しく観察することや、地震に伴う被害や社会的な影響も検討することもできる。

このように、遺跡で検出される地震の痕跡を総合的に研究する分野が「地震考古学」である。地震を予知し、歴史の中に地震を位置づける新しい研究である。

### 2. 液状化現象とは

遺跡で最もよく検出される液状化現象は、地表からさほど深くない所にゆる詰まりの砂（礫）が堆積し、地下水で満たされている状態で発生する。

地下の砂粒は、普段は、お互いに支えあって安定している。ある日、激しい地震動が加わると支えがはずれ、それぞれの粒子がすき間を小さくして少しでも安定するように移動する。このため、すき間を満たしている地下水が圧迫されて水圧が急上昇する。やがて、水圧の高まった水が砂粒や周囲からの土圧を支え、地層全体が液体の性質を持つようになる（液状化）。さらに、地下水と砂が上を覆う地層を引き裂きながら「噴砂」として地面に流出することになる。

この現象は、近代都市のライフラインなどに著しい被害を与え、防災上特に注目されている。また、この現象の存在を発見することは、過去に震度V以上の激しい地震動が存在したことの証明にもなる。

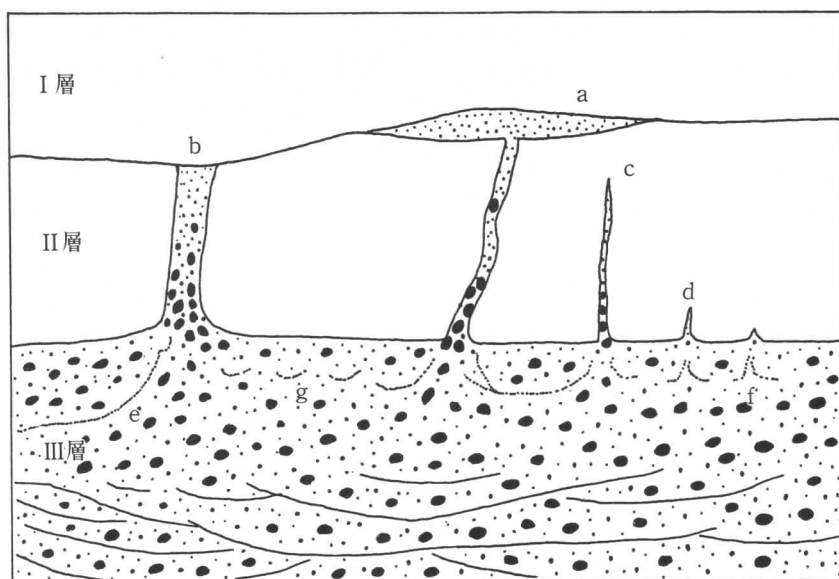


図1 地震跡の模式図

### 3. 遺跡で見られる液状化の痕跡

図1は遺跡で検出される液状化跡を模式化したものである。

aは地震当時の地表面に噴き出して広がった噴砂がよく残っているもの。溝・住居跡・水田などの凹地に残りやすい。噴砂に覆われるように地震直前の地面が保存されている。

bは噴砂が侵食されて残っていないもの。噴砂は侵食を受けて消失し易いので、多くの場合、bのような形で見出される。

地震の発生した年代は、a・b共にII層堆積後でI層堆積前に限定される。また、bのように遺構の埋土を引き裂いていれば、この遺構が埋まってからの地震とわかる。ここで激しい地震をおこしたという記録があれば、地震の年月日や時刻まで検討できる。

a・bのように砂のつまった割れ目を砂脈という。この砂脈が地震当時の地震面まで達しなかったものがc・dである。砂脈が当時の地表まで達したかどうか見極めることが、地震の時期を決める場合、特に重要になる。

液状化した地層の動きは、III層のなかで観察できる。地下水と砂が激しく流れ動いた場所では、奇妙な構造(模様)が残っている。地層の一部が大きくかきまぜられたような擾乱構造(e)、砂の筋が上へむかって細くのびる柱状構造(f)、いくつもの皿を横にならべたような皿状構造(g)、すべて液状化現象に特有の構造である。

一連の砂層や礫層であっても液状化現象によって、一様に乱されるのではない。地層の一部が激しく乱されていても、他のところでは、堆積したままの構造がそのまま残っていることが多い。III層下部には堆積当時の構造がよく残っているが、上部ではこれが消えて新しく液状化に特有な構造がみられる。地震動の強さや地質的な条件が微妙に影響しあって地層の乱れかたがきまる。

### 4. 観音寺遺跡の液状化跡

平成6年度に行われた発掘調査で、地震の液状化現象に伴う顕著な砂脈が検出された。

砂脈は、図2に示したように3つのグループ(a・b・cと名付ける)に大別される。

aは発掘区を横切るように、概ね東北東-西南西方向に発達している。詳細図(図3)によると、砂脈の西端付近は幅1~1.8mで、灰色シルト~粘土層を引き裂きながら東西にのびている。砂脈の内部は均質な極細粒砂で満たされており、一部ではシルト~粘土のブロック(幅80cm)を砂脈内に取り込んでいる。

砂脈の中~西部は幅1~1.8mで、シルト~粘土層を引き裂きながら東北東-西南西方向にのびている。内部は均質な極細砂粒で構成されており、幅1m・長さ3.4mのシルト~粘土のブロックを内部に取り込んでいる。

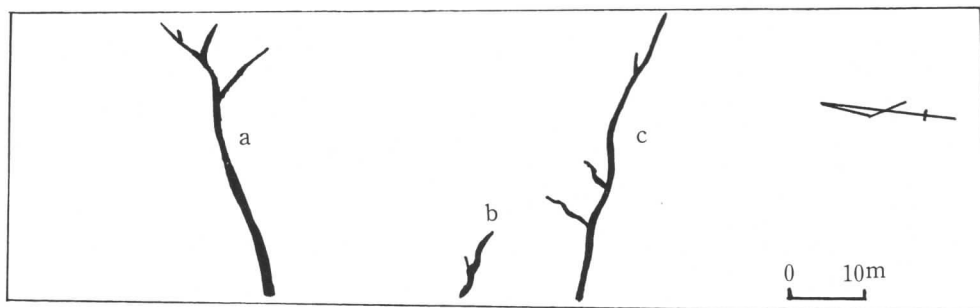


図2 調査地域の砂脈

砂脈の東部は、東-西、北東-南西、および、北西-南東にのびる複数の砂脈に分岐している。それぞれの砂脈（最大幅40cm）がシルト～粘土を引き裂き、内部は均質な極細粒砂で構成されている。また、図3に示したように、平安時代中期に形成されたと考えられる遺構、および、その埋土が、30～40cmの幅で引き裂かれている。

また、砂脈aの西端に沿って南北方向のトレンチを掘削して断面形を観察した。これによって、シルト層を引き裂きながら、極細砂粒が噴砂として上昇していることが確認できる。また、砂脈の上端は侵食をうけており、地表に至る厚さ70cmの地層（1952年以降に耕された耕作土）に覆われている。地下水の涌出しが著しく、地下で液状化した地層の確認が出来なかったが、砂脈内が一様に極細粒砂で構成されていたので、液状化層も均質で細粒な砂層である可能性が強い。図4はトレンチ内の噴砂を粒度分析したものである。

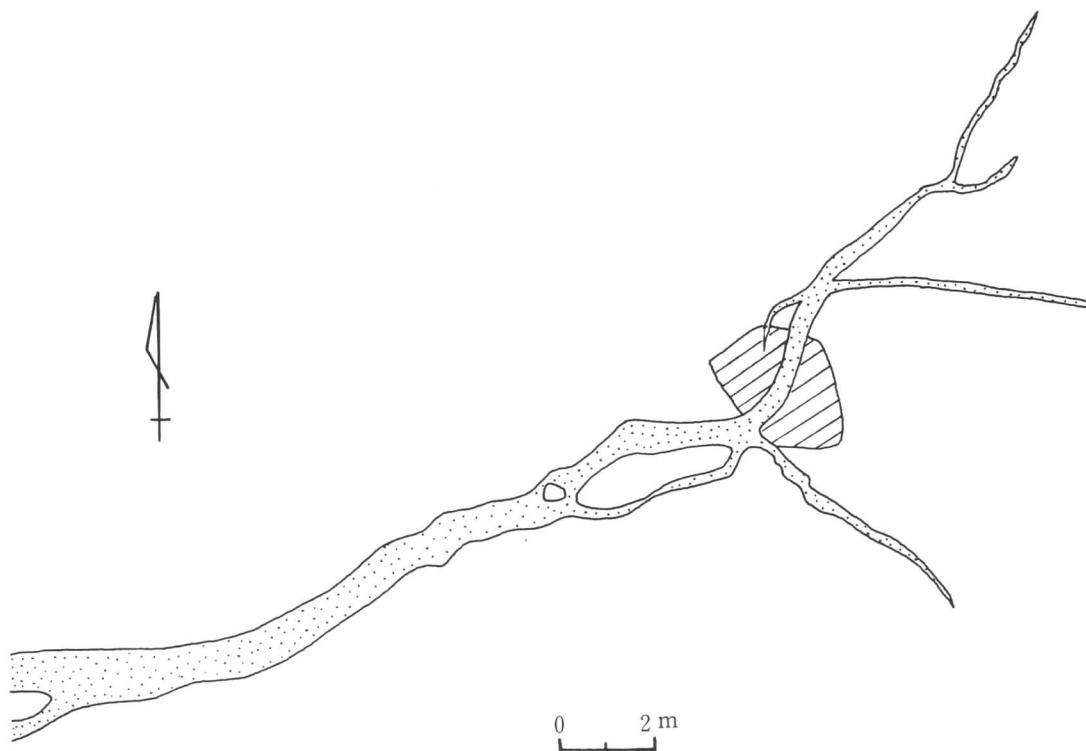


図3 砂脈aの詳細図（斜線の部分は平安時代中期の遺構）

## 5. 地震の発生時期

観音崎遺跡の砂脈の場合、平安時代中期の遺構を引き裂いていることから、平安時代中期以降に発生したことがわかる。また、1952年以降の耕作土に完全に削られているので、これ以前に発生したものと考えられる。

この地域で該当する時期に発生した地震の中で、特に激しい地震動が考えられるのは、1828（文政11）年12月18日の卯下刻（午前6時すぎ）の三条地震（M6.9前後）である。

この地震は、三条で全潰家屋439軒・死者205人、見付で全潰家屋545軒・死者127人、長岡で全潰家屋3千余・死者442人など、新潟県中部に著しい被害をもたらせた。『新編日本被害地震総覧』によると、加茂から長岡に至る北東-南西方向で長径30km・短径20kmの楕円状の範囲で震度VI（烈震）が推定されている。勿論

中之島町全域が烈震の地域に含まれている。

この地震を特徴づけるものは著しい液状化現象で、「与板在より下も加茂辺迄の内所々夥しく平地吹破水青砂等吹揚げ」（『資料三条地震』）のように、各地で地面が裂けて地下水と砂が噴砂した記録がある。

中之島町周辺も著しい被害を受け『資料三条地震』には、「今町皆潰れ、上下の人口少々残り死人知れず」「傍所村家七十軒の処五十六軒潰れ、即死十四人、怪我人知れず」「中之島家四百軒ばかりの処五十軒ほど立ち居る」「小古瀬七ヶ村皆潰れ」などの記述がある。

中之島組の庄屋が郡奉行書に提出した『地震変事二付品々書上帳』には被害の様子が生々しく描かれている。

例えば、脇川新田では、井戸の釣瓶が井筒より五七尺も上へ飛び上がり、又、井戸の中へ落ちた。中之島中西村・高山新田・下関新田・丸山興野堤通の平地は窪み、田畑の裂け口からは青砂水を吹き出した。未宝村では門次郎という人の家の椽の上まで砂を吹き出し、炉の中に入れていた茶釜が深く埋まった。堅地砂地の所は裂け、和らか土の所は陥んだという記述がある。

江戸時代には、新潟県内で大きな地震がいくつか発生している。特に、上越市周辺では、1666（寛文5）年2月1日（M6.7前後）、1751（寛延4・宝暦元）年5月21日（M7以上）の2回、村上市周辺では1670（寛文10）年6月22日（M6.7程度）に地震が生じている。この中で1751年の地震では震源から80km近く離れた中之島組でも、震度V（強震）に達する震動があり、31軒が全潰し、畑の地割れから砂が噴き出している。

また、1964（昭和39）年6月16日の新潟地震は、新潟県下に大きな被害を与え、新潟市内で著しい液状化現象が生じている（中之島の震度はV）が、時代的に当遺跡の液状化跡には相当しない。

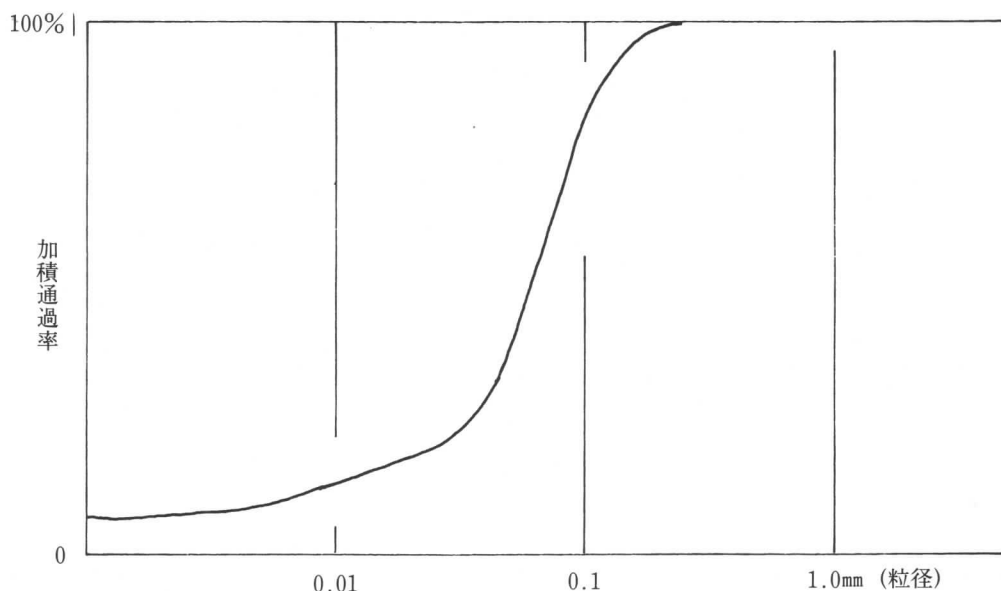


図4 噴砂の粒径加積曲線

これまでに得られた資料から、観音寺遺跡の液状化跡は、規模が大きいことから考えても、当地域に特に著しい地震動を与えた1828年の三条地震による可能性が最も高い。

## 6. まとめ

中之島町の観音寺遺跡において顕著な液状化現象の痕跡が認められた。

液状化に伴って形成された砂脈は、平安時代中期の遺構を引き裂き、1952年遺構の地層に覆われている。このため、平安時代の中頃から1952年頃に至る時期に生じた大きな地震によって形成されたことがわかる。

この時期に発生したことが判明している地震のうち、中之島町が特に大きな地震動（震度VI）を蒙ったのは、1828年の三条地震である。そして、当遺跡の液状化跡も三条地震によって形成された可能性が最も高い。

これまで、栄町の石塚遺跡や加茂町の釜淵遺跡などで、三条地震によると考えられる液状化の痕跡が見出されている。今後、中之島町周辺の発掘調査で地震の痕跡が検出されることが大いに期待される。

### 《文 献》

- 伊藤秀和 (1993) 三条地震の考古学的痕跡について—加茂市釜淵遺跡の調査から—  
加茂郷土誌16号
- 中之島村史編集委員会 (1988) 中之島村史
- 栄町教育委員会 (1991) 石塚遺跡
- 寒川 旭 (1992) 地震考古学—遺跡が語る地震の歴史— 中公新書
- 田中 琢・佐原 真編 (1994) 発掘を科学する 岩波新書
- 東京大学地震研究所編 (1984) 新収日本地震史料 第4巻別巻
- 宇佐美龍夫 (1987) 新編日本地震総覧 東京大学出版会

# 写真図版



調査前全景（南より）

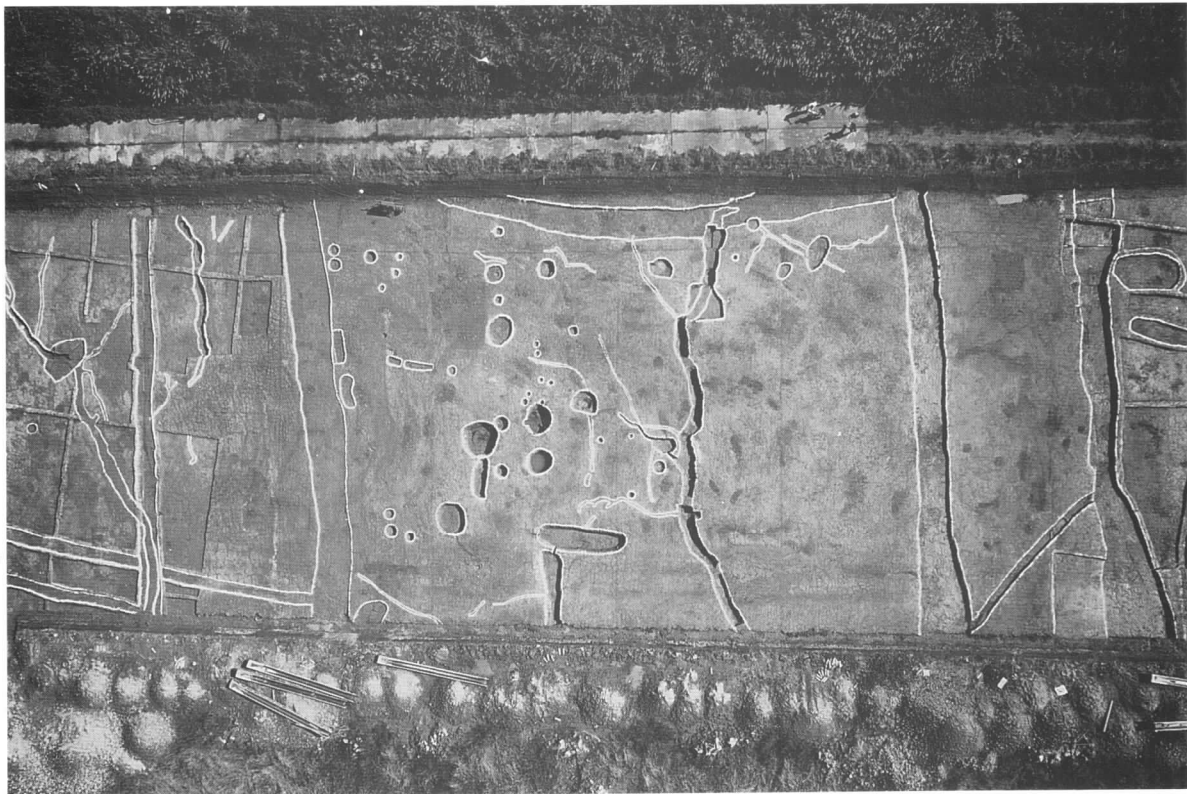


遺跡遠景

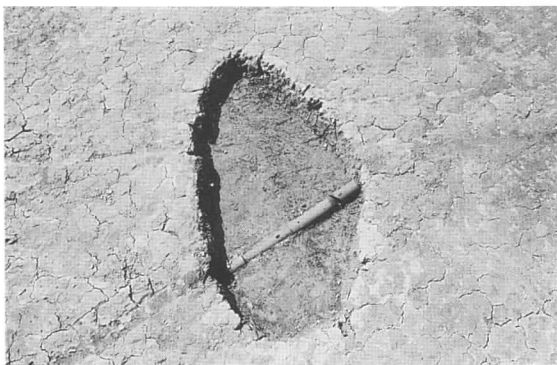




遺跡と周辺の現況地形（北より）



遺跡全景



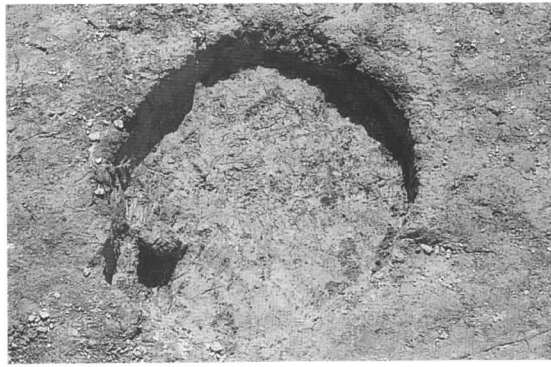
2号土坑



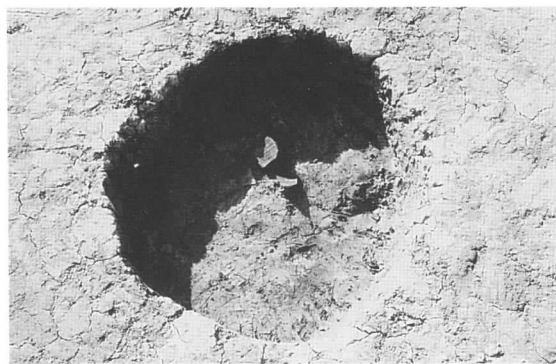
3号土坑



8号土坑



9号土坑



12号土坑遗物出土状况



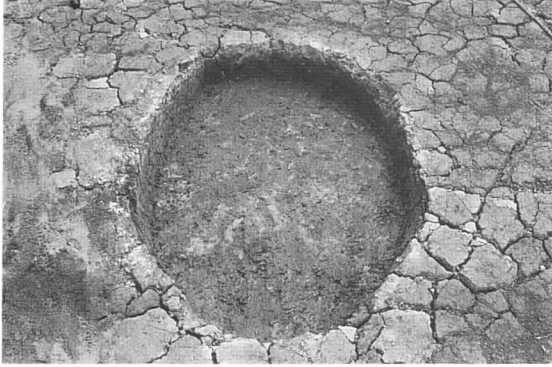
同 近景



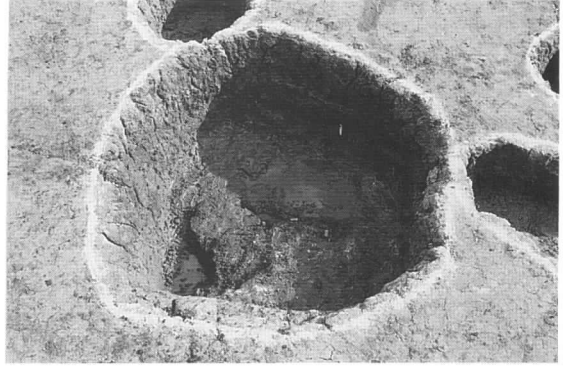
同 近景



12号土坑检出状况



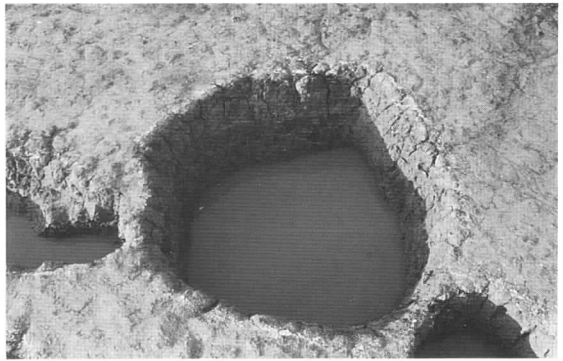
10号土坑



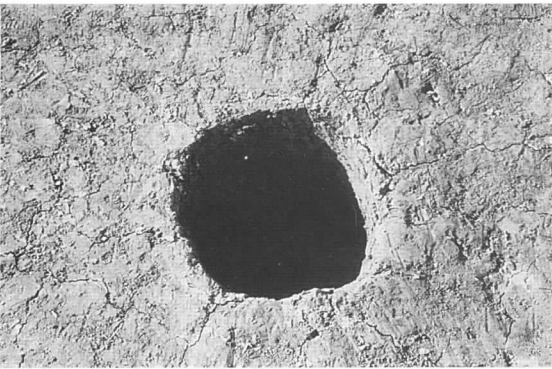
13号土坑



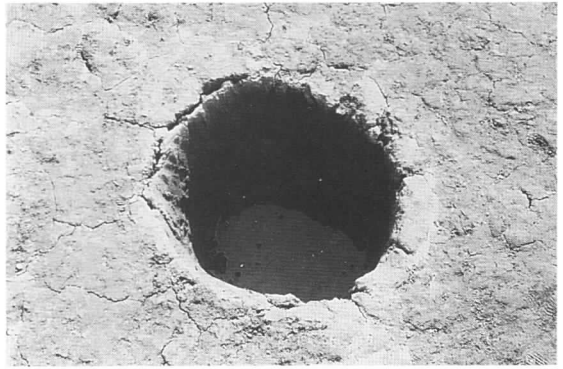
同 管状木製品出土状况



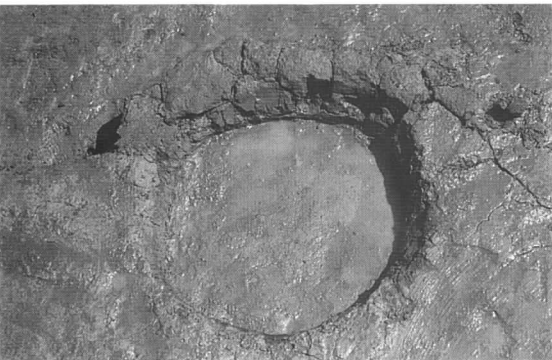
13号土坑完掘状况



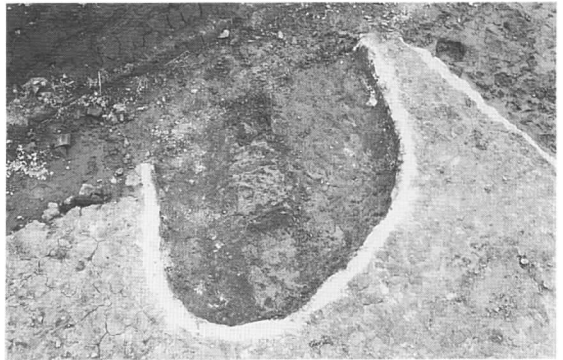
17号土坑



26号土坑



30号土坑

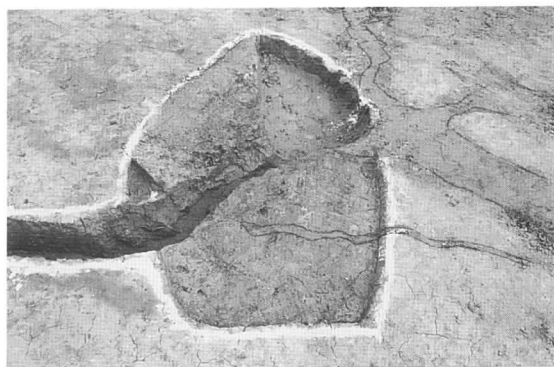


38号土坑

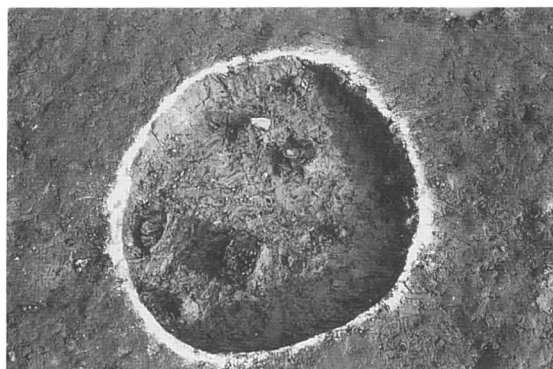




35号土坑遺物出土状況



35号土坑



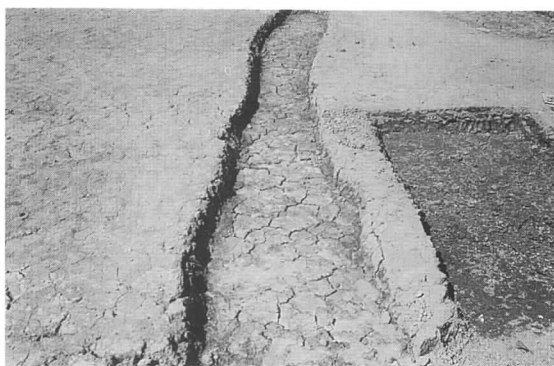
37号土坑



同 遺物出土状況



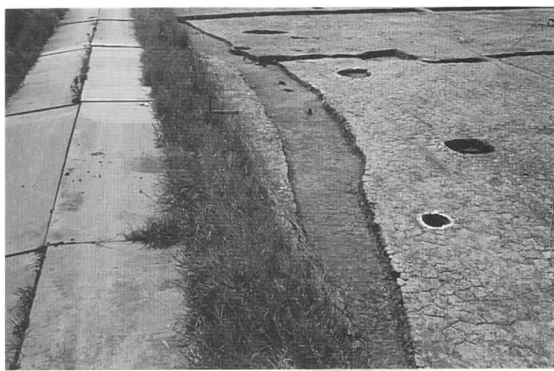
同 遺物出土状況



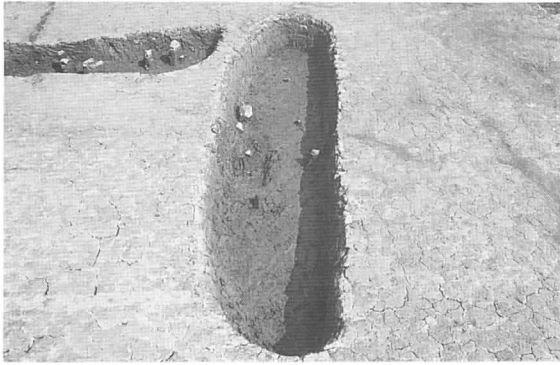
1号溝



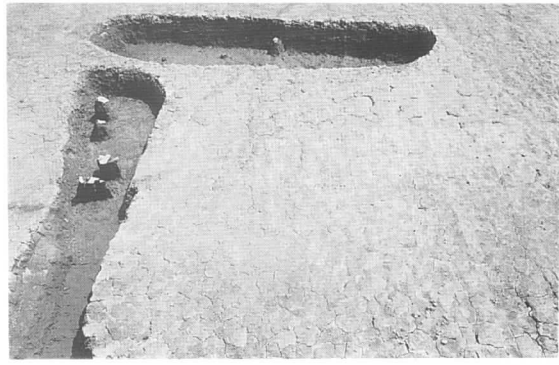
5号溝A・B (右A 左B)



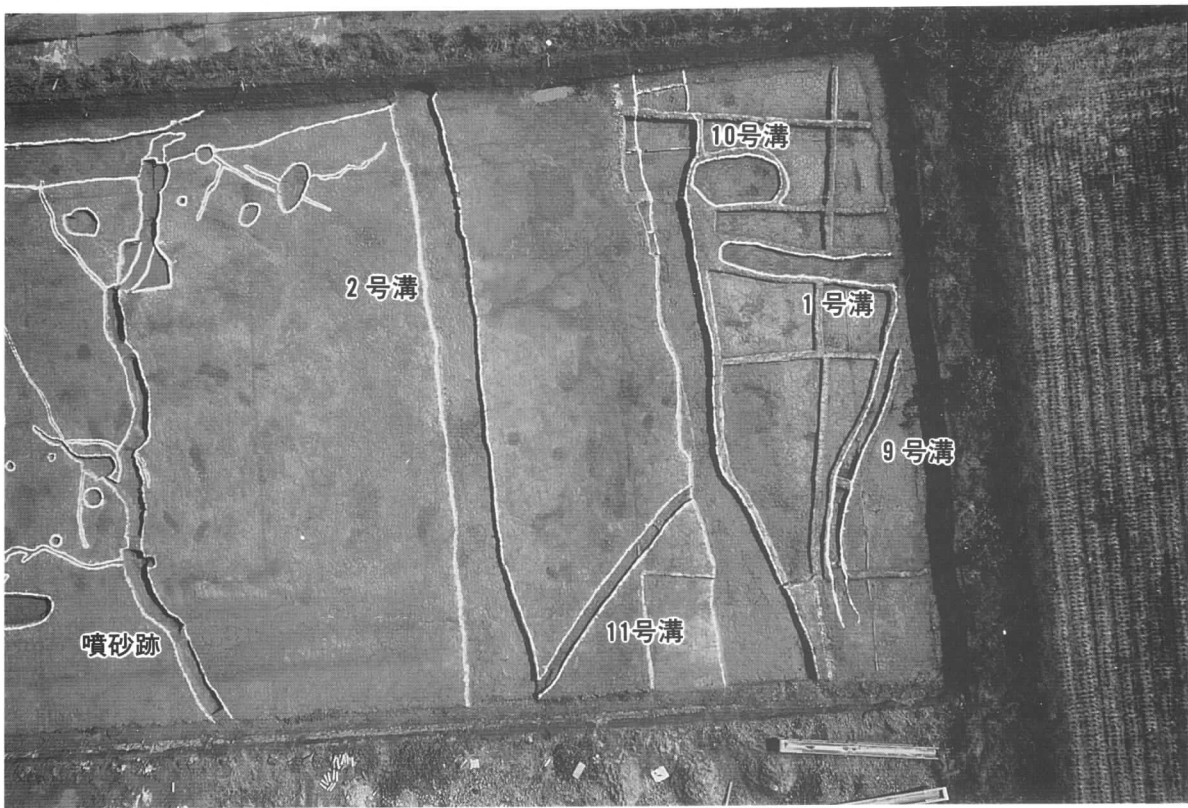
6号溝



7号溝



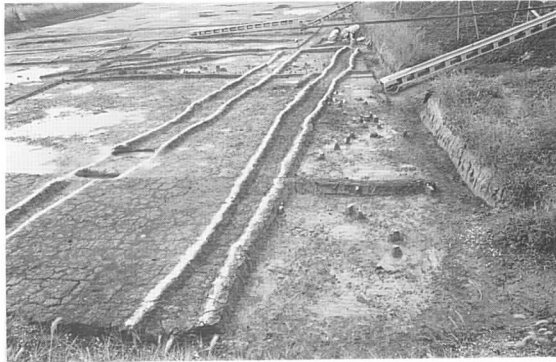
8号溝



調査区南部溝配置状況



9号溝



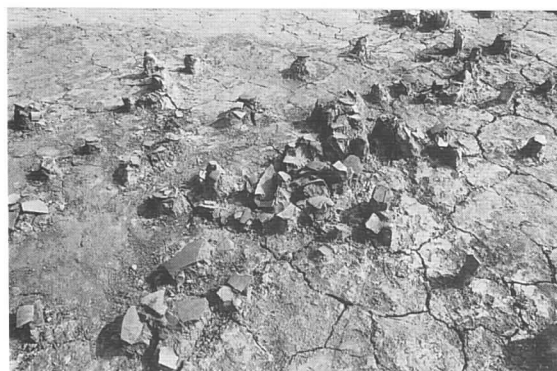
5号溝下遺物包含層 (A-1 G)



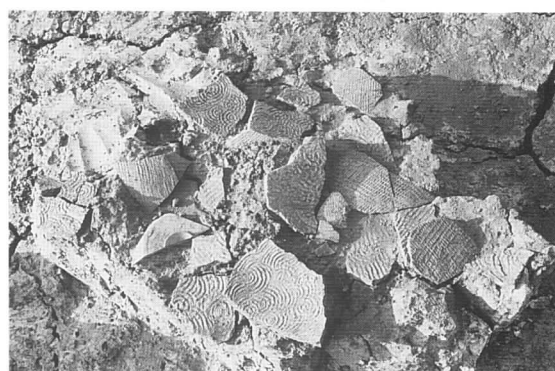
包含層遺物出土状況 (A-1・2 G)



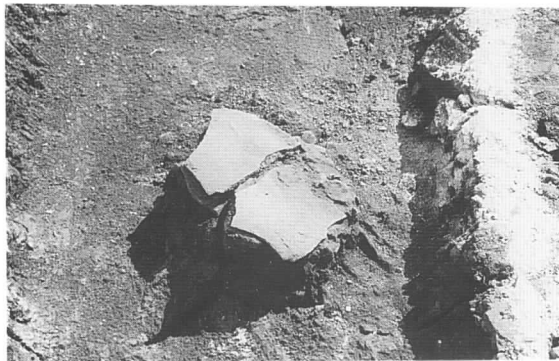
同 近景 (A-1 G)



包含層遺物出土状況 (B-2 G)



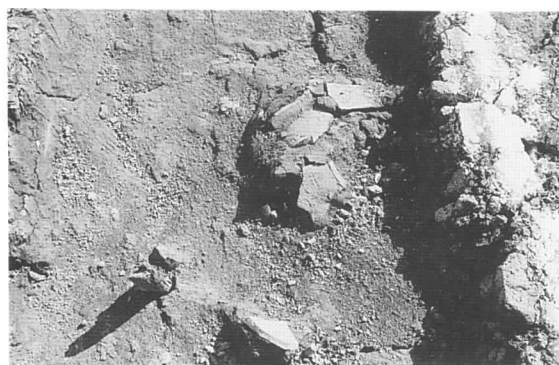
同 近景



同 近景



同 近景



同 近景



同 近景





包含層遺物出土近影 (C-3 G)



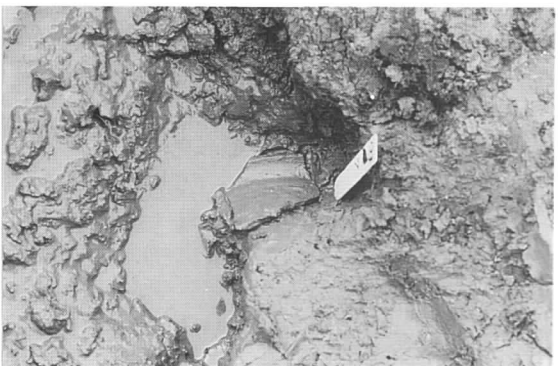
同 (C-4 G)



同 (D-2 G)



同 (D-3 G)



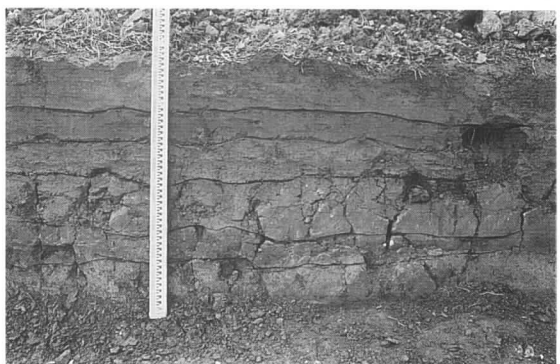
同 (D-3 G)



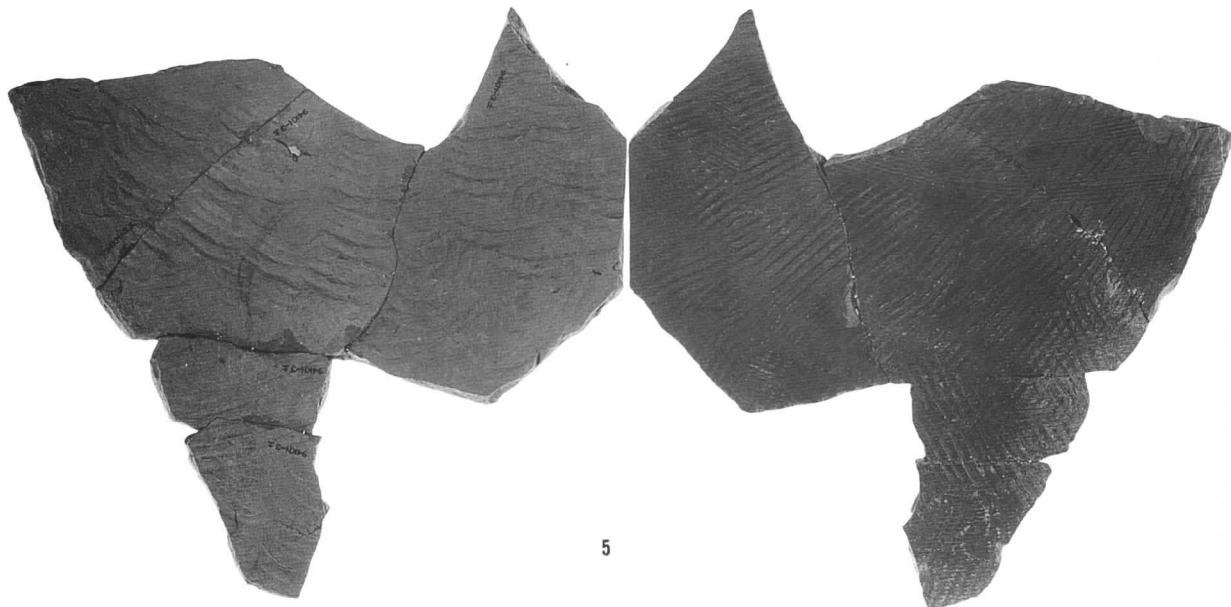
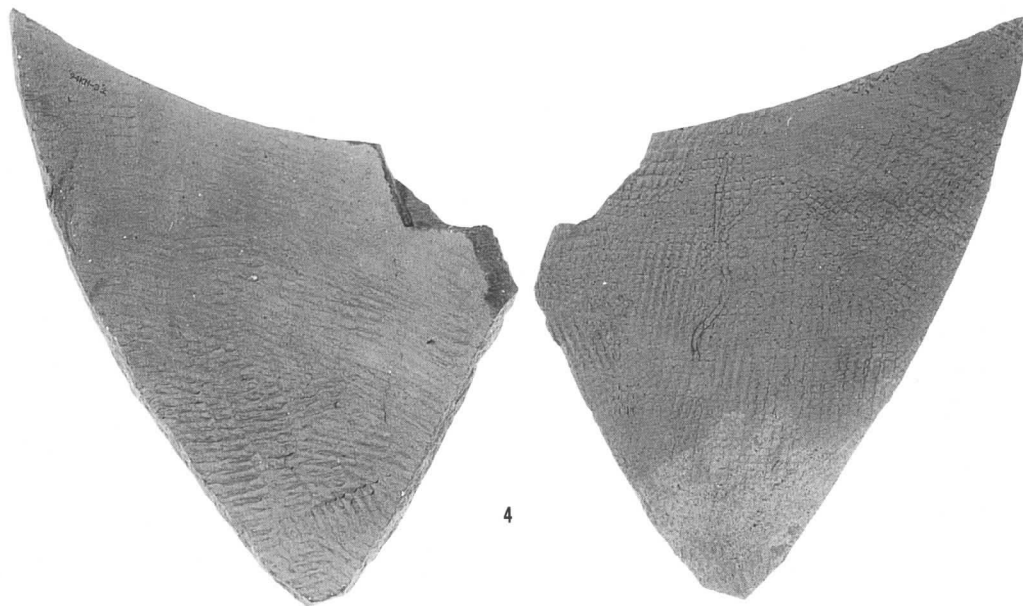
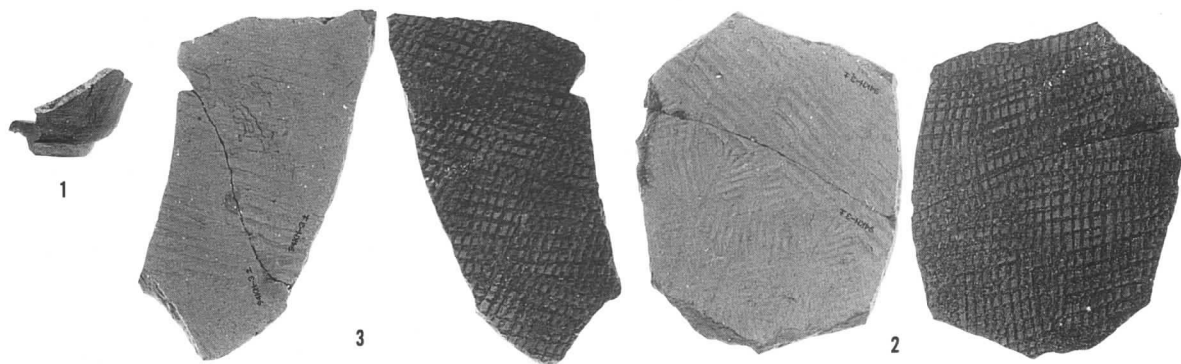
遺物包含層調査状況 (D・E-9・10G)



遺物包含層遺物出土近影 (D-9 G)

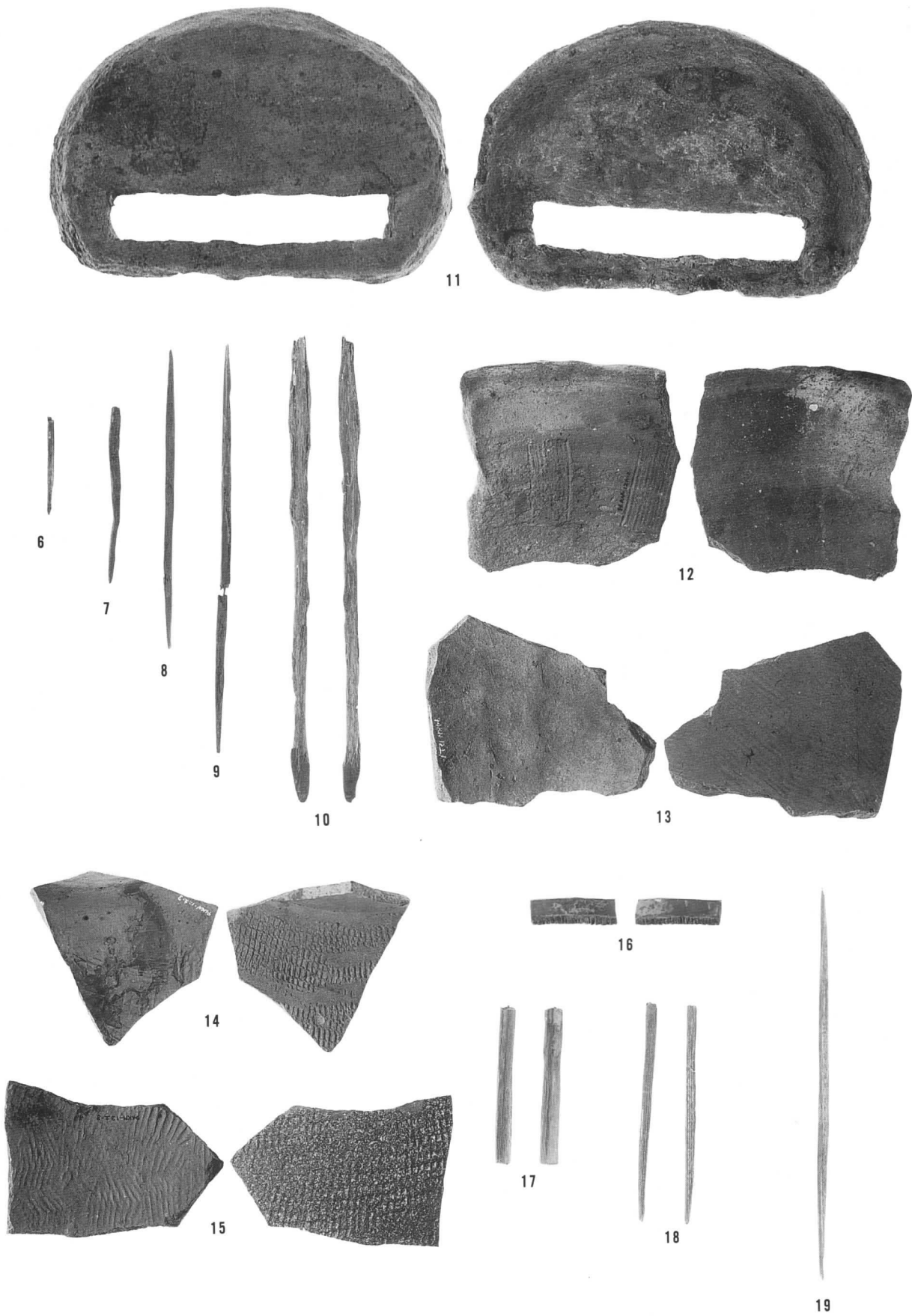


基本土層

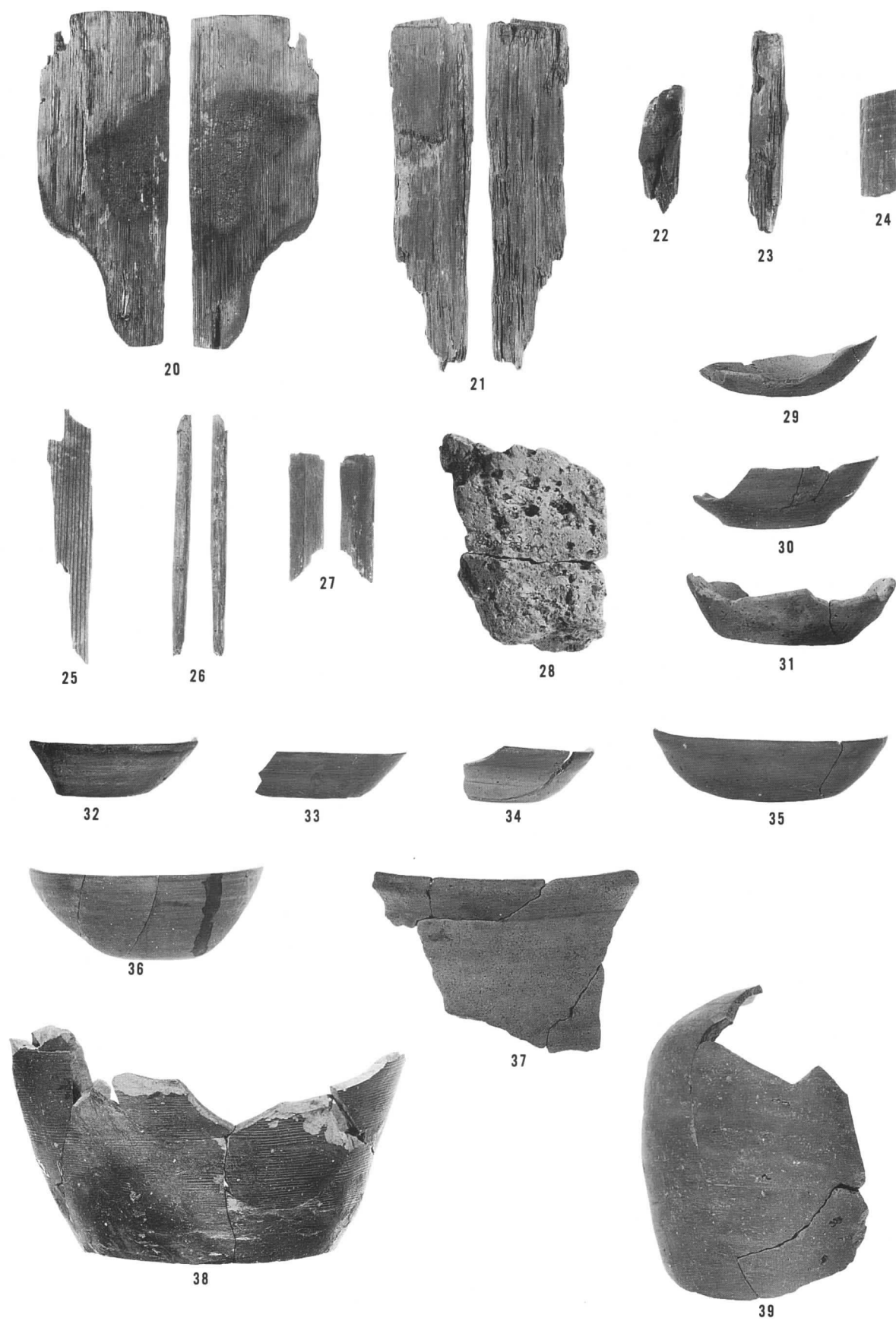


3号土坑出土遗物

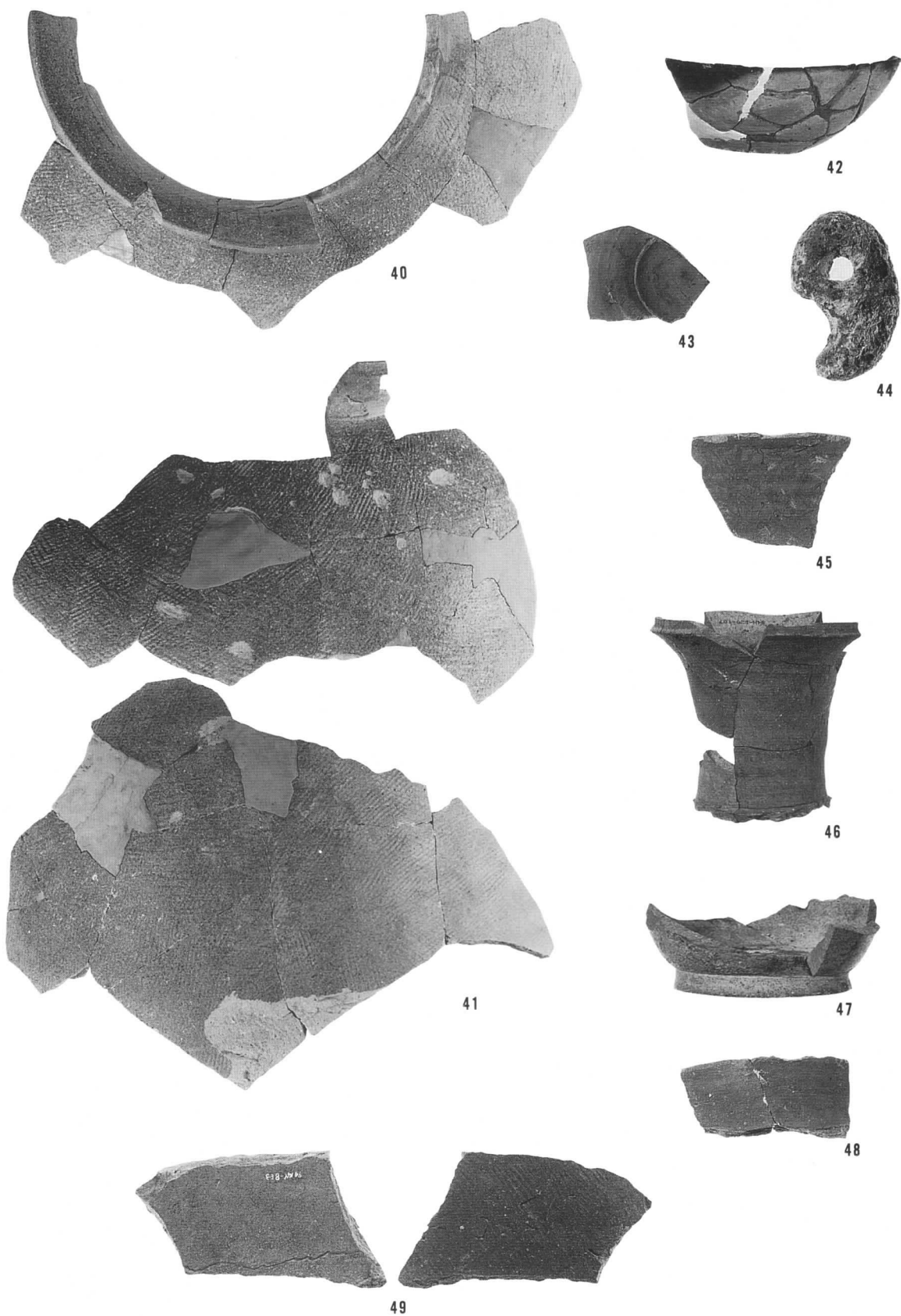




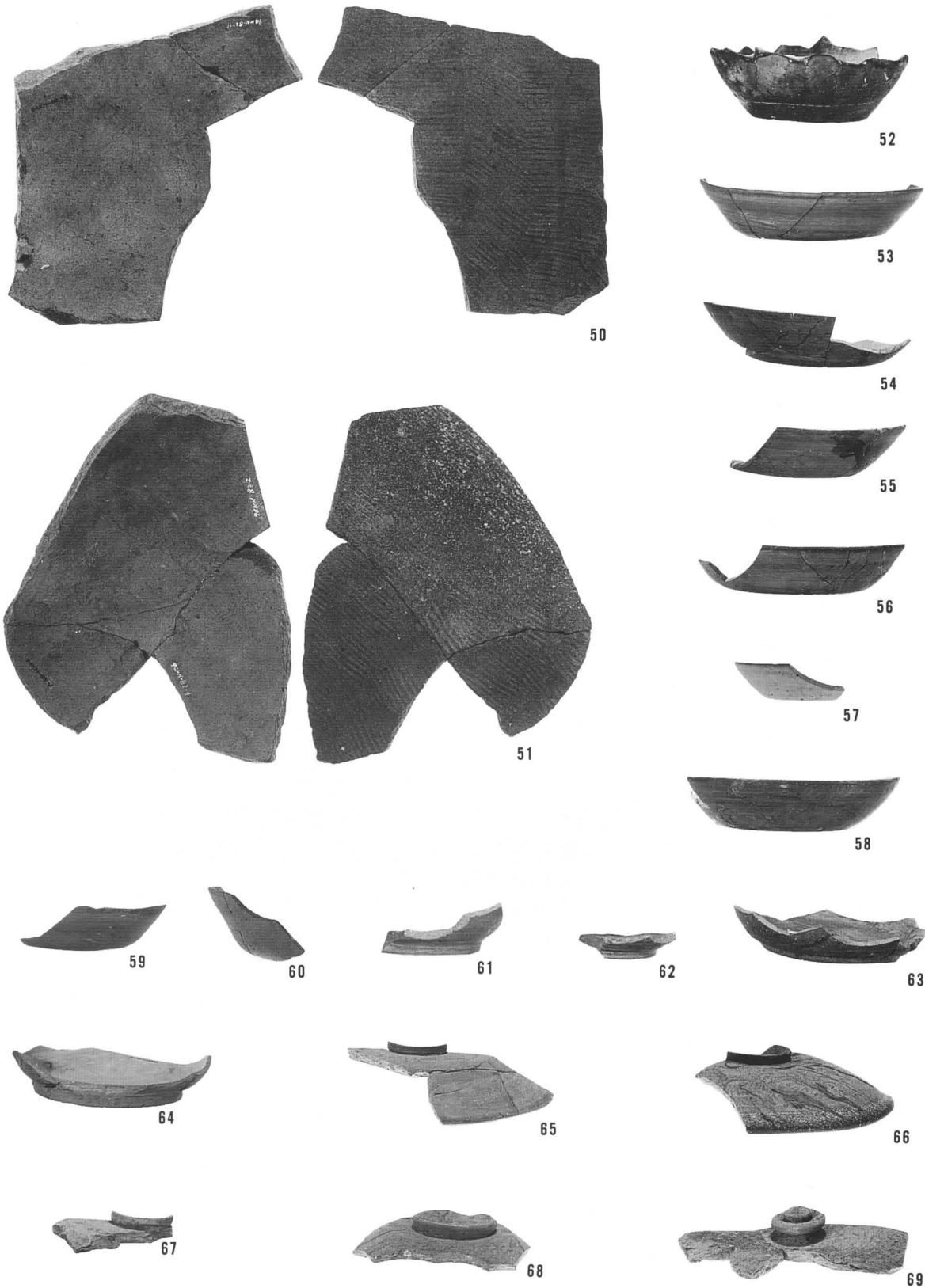
11~13号土坑出土遺物 (11はスケール1/1)



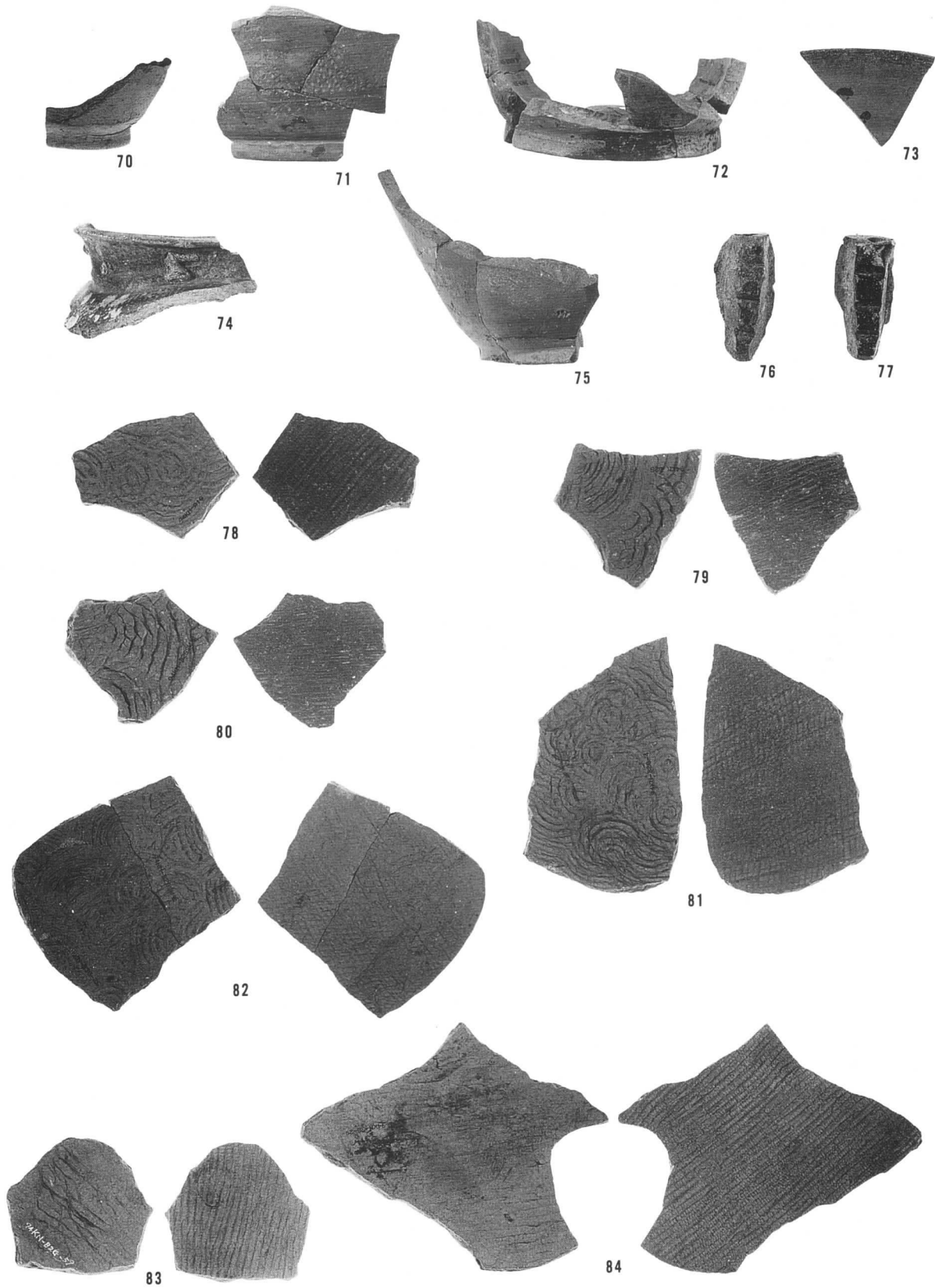
13·28·35号土坑出土遗物



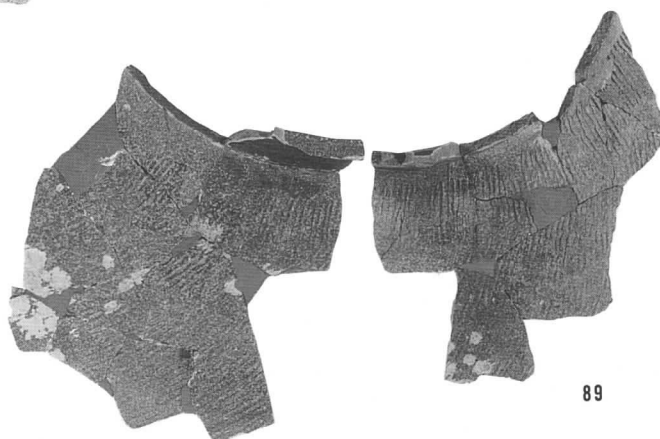
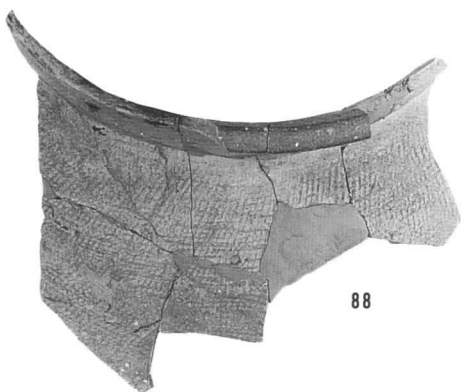
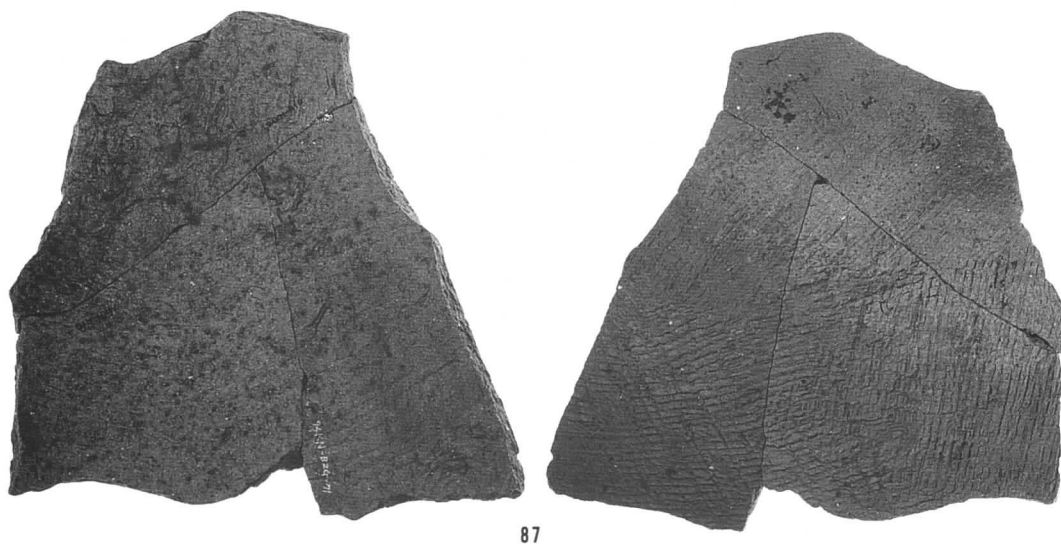
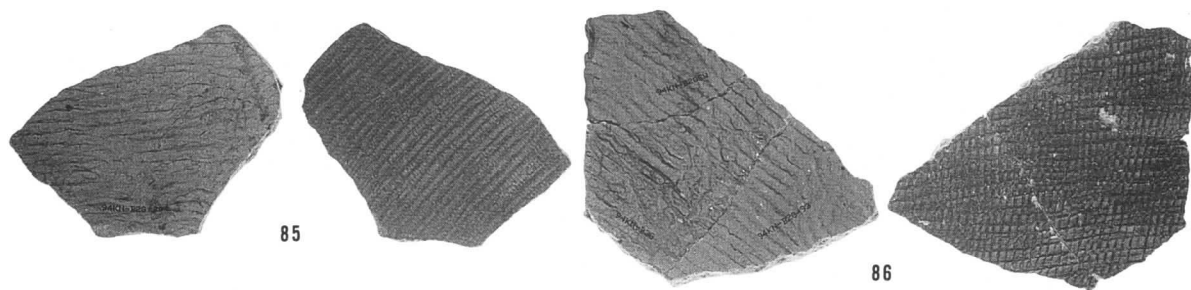
35·37号土坑·2·4·5·8号沟出土遗物



8号溝・グリッド出土遺物(1)



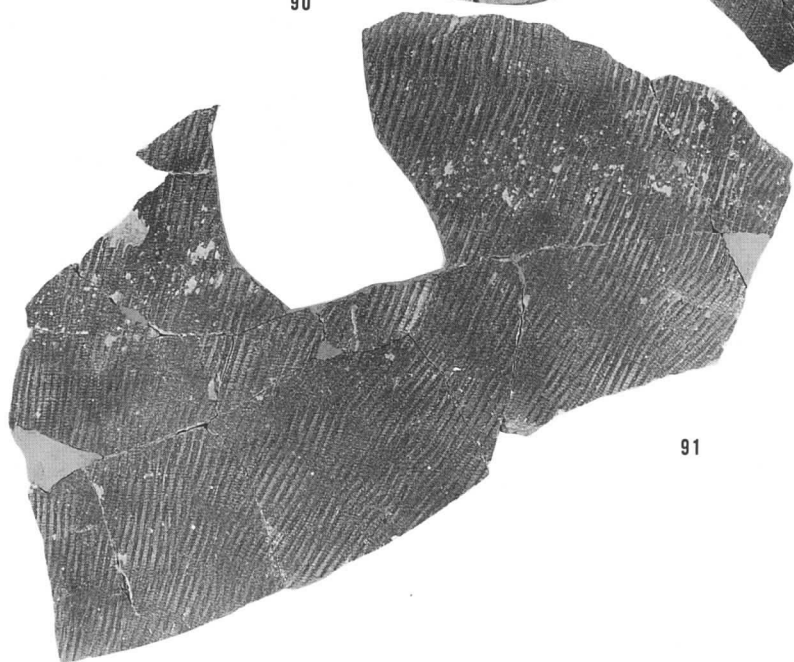
グリッド出土遺物（2）



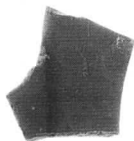
グリッド出土遺物（3）



90



91



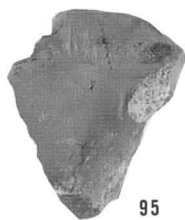
93



94



96



95



97

グリッド出土遺物(4)





92

92. 大甕上半部接合展開

グリッド出土遺物(5)



新潟県中之島町

観音寺遺跡

平成7年3月20日 印刷

平成7年3月25日 発行

編集 山武考古学研究所

発行 中之島町教育委員会

印刷 (株) 文化総合企画

Tel (0476)93-0593